

伝書鳩

第
17
号



井上靖記念文化財団

ホタル

井上 靖

ドイツ語のロイヒト・ケーファーは光を灯した兜虫、英語のファイアフライは火を背負った蠅、フランス語のヴェール・ルユイザンは輝く昆虫です。日本の言葉では螢は火を戴いた虫とでも言うのでしょうか。

東洋のいまは亡んでしまった民族の、いまは死んでしまった言葉では、ホタルを消える消える火と呼んでいます。私は小さい生きものの生命を、点滅する須臾しゅゆの光の中に見ないで、その暗黒の中に見つめたこうした民族のあったことに打たれます。罪業とか前生とかいった思いは、この民族と共に亡んでしまったのです。



ホタル（詩） 井上靖…………… 2

ご挨拶 井上修一…………… 6

井上先生からの盗掘 水口義朗…………… 8

シルクロード、ヒマラヤの旅 石原國利…………… 16

業績にも品格 曾根博義氏を悼む 藤澤全…………… 24

鳩のおしらせ①…………… 27

井上靖の原郷 伏流する民俗世界 4 野本寛一…………… 28

昭和十五年の井上靖 日記に見る読書三昧の日々 井上甫壬…………… 44

平成二十七年度 事業報告 井上修一…………… 56

鳩のおしらせ②…………… 65

図書だより…………… 66

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

ご挨拶

理事長 井上修一

本財団のように遺族が故人の業績を讃えて設立運営する財団のことを、一般に「遺族財団」と呼ぶのだそうです。

そうは言っても私たちの場合、遺族だけでは何ができるわけでもありません。財団がなんとかここまでやって来られたのは、生前の父をご存知だった大勢の文化界、経済界の方々からご指導を受け、また研究者の方々から温かく支えていただいたからであります。ことに井上靖文化賞に関しては、十五年間にわたって小学館並びに一ツ橋綜合財団の皆様にご世話になりました。ことに先代の相賀徹夫社長には甚大なご配慮をいただきました。

しかし、いつまでも皆様のお力にすがりっぱなしでいるわけには参りません。平成四年の財団設立から数えて二十四年、一般財団法人に移行してからでも既に四年の歳月が過ぎました。この間に遺族も高齢になり、将来の財団運営に不安を感じるようになり、財団の理事、

評議員の方々からいろいろご心配をいただきました。

そこで遺族一同思案の末、意を決して、父の書齋と客間を移築していただいた井上靖記念館のある旭川市に、表憲章副市長を通してご相談したところ、願ってもないご快諾をいただきました。その結果、二十八年度から本財団の事業は旭川市と共同で運営することになり、懸案の井上靖文化賞も装いを改めて復活することになりました。遺族としてこれに勝る喜びはございません。

最後になりましたが、新潮社版の井上靖全集を個人で編集してくださいました曾根博義先生が、今年の六月十九日にお亡くなりになりました。先生は長年本財団の理事をお務めくださいますとともに、井上靖研究会の機関誌『井上靖研究』の編集長として、研究会をご指導なさいました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

平成二十八年十月吉日

井上先生からの盗掘

水口義朗（元中央公論社編集者・文芸評論家）

『新潮』平成二十一年十二月号に「新発見 井上靖中国行軍日記 昭和十二年八月二十五日（昭和十三年三月七日）」が発表されたとき、「あ、あのときの古ぼけた大阪毎日新聞社員用の手帳だ、俺はずっと前に発見していたのにスクープしそになってしまった」とほぞをかみ、井上先生との書斎での光景を思い出していた。

『新潮』の曾根博義さんの解説によれば、それは、井上先生が、日中戦争初期に輻重兵特務兵として応召し、中国河北省に送られた半年間の従軍日誌。平成二十年八月、井上ふみ夫人が九十八歳で亡くなられたとき、夫人が最後まで手もとに置いていた遺品の中から、家族が発見し、夫人の一周忌を済ませたところで公開することにしたものだと言明されていた。

私は昭和三十三年、井上先生が五十一歳、文字通り、流行作家に躍り出たときから、警咳に接する栄をえていた。高度成長へ向かう予兆の中、いまだ超就職難で大学院で無聊をかこっていた。出版界に週刊誌ブームが起こり、老舗中央公論社が、〈新週刊誌要員募集〉の新聞広告を出した。これっきゃないぞと心せかされて応募した。千五百人ほどが法政大学の階段教室で受験。論文をおんな言葉で書くというキュウソネコカムの奇襲作戦でパス。三次面接まで進んだ。

社の現役編集者に探りを入れたら、「作家か学者か、それなりの著名人の紹介か推薦状がないと、最終的には決定しない」とアドバイスを受けた。

私の妻暢子は、叔父が沼津中学で井上先生と同窓と

いう関係で、先生の原稿の清書のお手伝いに通っていた。そのついで、井上先生に保証人になっていただいたおかげで、今日がある身のほどなのであります。おんな言葉の論文に不安になった嶋中鵬二社長は、井上先生のお宅にうかがい「この人大丈夫ですか」と確認したと後日、社長から聞いたが、井上先生は、そのことについては毫もふれられなかった。

長いおつき合いなのに、連載小説担当のチャンスが無かった。先生が六十になられたころ、伊藤整さんと二人で、「六十になってからやと自分のやりたい仕事に専念することが許されましたね」と口にされるのを聞いて、現役売れっ子のすさまじさを実感した。

先生が六十代になってからは、うかがうたびに、話題は利休に終始し、続きものを読み聞かせていただくようなゼイタクだった。やがて、それは『本覚坊遺文』となって結実、七十五歳のとき、再び日本文学大賞を受賞された。

次からは、もっぱら孔子の話。お宅にうかがった多くの人たちは、あたかも『孔子井上』の講義を受ける

ことになった。孔子の「仁」の説明の途中で書斎に戻られ、中国の二世紀の辞書を持ってこられた。「まず人と人が信じ合うのが、仁だと思います」と実に楽し氣だった。

その時期、私は、孔子の次の作品を狙って、たびたび押しかけていた。大作の約束をとらないことには、編集者としての意地が立たないといった決意と、恩返し of 思いも秘めていた。

- 一、『わだつみ』の完結
- 二、新聞記者の眼で見た終戦前後
- 三、『親鸞』

この三つが『孔子』のあとの作品の予定。ある日、先生は、話の途中でつと立ち上がり、書斎の押し入れの襖をあけ段ボールの箱をかかえてこられた。「この中に私の大事なものが入れています。非常持ち出し用にね」。

まず取り出されたのが、一冊の古ぼけた手帳。「軍隊に入ってから、ひそかに日記をつけていたんですよ。書くものがなくなるから、できるだけ小さい字で。ご

らんなさい、びっしりとすごいでしょ」。

虫メガネが必要なくらい小さな字でうまっていた。すべてを記録しておくぞという気迫と根気、新聞記者魂が、汗としみになじんだ頁からうかがえた。ためつすがめつしていると、素早くしまわれてしまった。

「この中には、これからぜひ書かねばならないものの資料が入っています。新聞記者時代の記録もありますから、安心していいですよ」。

井上先生は、大阪空襲の中、市内に踏みとどまり、終戦の詔勅^{しよくてく}を聞いての歴史的な感想を『毎日新聞』の紙面に書くだけではなく、玉音放送の翌日、八月十六日の紙面の大半を埋められた。井上靖の『敗戦無頼』の原稿をぜひとってみせるぞと誓っていた。終戦時、私自身は、集団学童疎開先の松本市の寒村、新村の小さなお寺専称寺でひたすら空っ腹で戦時歌謡をうたっていた。十月に帰宅。蒲田の駅前で進駐軍兵士がジープの上から、集まった子供たちに撒くチョコレートやチューインガムを「ギブミー、ギブミー」と競って手をのばしていた。十歳の秋。

たら最高ですね」と言われた。

後日、旧友の野間宏さんとの対談「詩から小説へ」(『群像』昭和五十年一月特大号)を読んだら、終戦直後の気持や親鸞^{しんろう}について、私がかがったディテールが、二人の間で、くわしく話されていた。そのとき、先生は六十八歳。エッセイ集『わが一期一会』を出された年。翌年には文化勲章を受章された。

「記者時代、野間宏さんが新聞社に訪ねてきてくれておしゃべりしていたので、私は文学からはなれないですんだ」と言われるのも何回か聞いていた。杜の前の喫茶店でコーヒーを飲みながら、詩の話、その前に小説を書いたほうがいいなど、作家としてスプリングボードの上にお二人は立っていた。まさに揺籃^{ようらん}の友だちづき合い。井上先生はまだ三十八歳。

昭和二十一年春、野間さんが、『黄蜂』という季刊雑誌に「暗い絵」を発表。井上先生の対談での表現によれば「急に全部野間宏になってきた一時期がある」となった。井上先生が野間さんにお祝いをしてあげる

「敗戦後の昭和二十二、三年までは、ほんとにぼかつとした、解放された自由な時間がありました。あの前後をぜひ書いておきたいですね。書き出せば、一気に書けます」。このテーマなら、絶対に井上先生をフォローできるので、私が在籍していた『中央公論』本誌でいただく約束をした。

その次に、玉手箱から先生が取り出されたのは、一巻の巻物。畳の上に長々とひろげて見せられた。漢字がぎっしり、金銀彩色の絵巻物のようでもある。

「仕事にいきづまったときには、これを眺めると、大いに元気づけられますね。親鸞の『観無量寿経集註』というもので、国宝です。これは復刻版の一本なのです。よく見てごらんなさい。行間、紙の裏、欄外からすべて、ぎっしりと註が書き入れています。その頃中国から入っていた何冊かの高価な經典の註解が、細かく書き込まれていますね。いかに努力、勉強していたかに驚かされます。私なんかまだまだ、仕事に全力をそそいでいるのかと、これを眺めると、つねに元氣が出るんです。そうですね、親鸞を書きながら死ぬ

つもりが、いつの間にか、野間さんの母堂がささやかなお祝いの会をもうけて、ご馳走をしてくれた。

その席で野間さんが井上先生に、さかんに「ぼくでも書けるんですから、書くほうが早いですよ」と、重い口調ではにかみながら慫慂^{しんよう}した。「それでその気になって、よし、書いてみようかという気になった(笑)」。

四年ほどたって井上先生は「闘牛」によって第二十二回芥川賞を受賞した。野間さんとの対談ではこう語っていた。「そして野間さんが書かれて四年ほどたって私が芥川賞をもらったときに、最初のお祝いの会は野間家でやったんです。あのときも私だけだったですかね。その間に私は小説を書くか書くまいかぐらぐらしているとき、あるいは『猟銃』ぐらい書いていたとき、東京へ出てきてお会いしたことがありましたね」と、四十三歳でのジャンプまでの時間を話されていた。

井上ふみ夫人の歌集『せせらぎ』をひらいてみよう。

〈芥川賞受賞〉

オーバーを着たままに 取った取ったと小踊りし
悦びておりあの日の靖

晩年の文壇の紳士しか知らない人たちは、この短歌に、ふみ夫人の母性を感じるだろう。

〈結婚〉

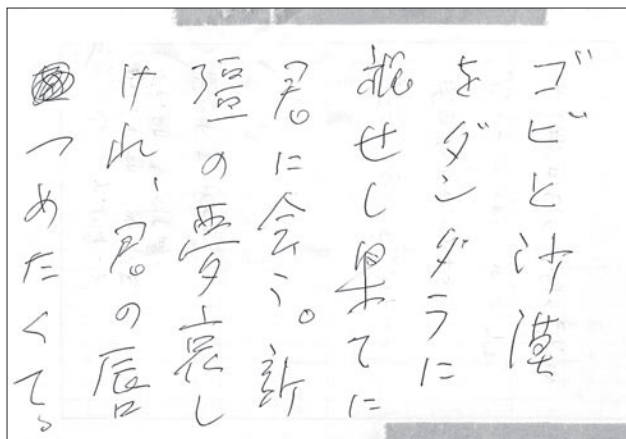
どうしても 吾をと望みくれしまま
夫婦となりぬ運の始まり

ご夫妻の鴛鴦の契りぶりに全員納得だ。

〈お酒飲んで帰りの遅い靖に〉

あの角で 毎夜三時に迎えけり
雨をのぞいて雪の夜も待つ

この短歌は、平成三年一月二十九日に井上先生が亡くなられてから、二年後に作られたもの。そのつづき



筆者が盗掘した井上先生の“幻の演歌”（座興詩のメモ書き）

かで、葡萄屋ではだいぶ酩酊されご機嫌。ジャーナリスト、編集者数人で歌になった。どんな歌でもへ月の沙漠を——のメロディになってしまいう連中。先生はここに聞いていらしたが、みんなの歌に合わせて、口

がある。平成十一年三月六日に、NHKハイビジョン中継「ときめきにつぼん」文学のふるさと・天城湯ヶ島」という大がかりな番組があった。その中で私は、湯ヶ島小学校、井上少年の母校の庭でふみ夫人と対談をした。井上先生の湯ヶ島時代、「しろばんば」の銅像についてなど、いろいろお話をうかがった。そのなかでも、今でも一番憶えているふみ夫人の言葉といえ、ば、「わたしは毎晩二時には玄関から外に出まして、靖の帰りを待ちます」という毅然としたやさしさだ。「ええつ、すごいですね」と驚嘆の声を私は飲み込んでしまった。誰でもできることではありません、ふみ夫人の邪気のなさだ。

夜の部に入ったので、二時帰宅までの銀座の酒場「葡萄屋」に舞台を移そう。

時は、昭和五十四年九月十一日夜。井上先生は七十二歳、その年、七月下旬、中国を訪れ蘇州で映画「天平の甍」のロケーションに立ち合ったりなどされていた一カ月の西域取材中、何かの事情で禁酒されていたと

ずさんだり、メモ用紙に何か書いたり、お節介の側近が、「それから、それから」とせかしたり。いい気分になった井上先生の即興詩のメモを、私はバーを出るときに、ひそかにポケットに入れて、先生と車に乗った。破り捨てられる運命にあるものだったのだが、盗掘者がいたのである。これらは、詩集に入る前の原石でもあるので、記録しておく。

誰にもいえない あのひと
スバシ古城に 立つべきを
何の因果か 荒ぶれし
無頼の輩と ともに立つ

これは、先生が、スバシ河の西岸に広がっている大遺跡をたずねたとき、同行者はみな、むくつけき男たちで、いい女は残念ながらいなかったと苦笑し、なげいている情景である。このとき、先生は体調をくずし、高熱で意識を失ったりなさったらしい。

流れ流れて カシユガール

熱は少々 あるけれど

行かざあなるまい タリム河

わが若き日の 血の騒ぎ

ゴビと沙漠を ダンガラに

旅せし果てに 君に会う

新疆の夢 哀しけれ

君の唇 つめたくて

最後の〈君の唇 つめたくて〉をめぐって、「なぜ冷たいのですか」など、酔っぱらってがやがや大いに騒いだ初秋の一夜。座興の詩とはいえ、その場での決定稿として直筆で書かれたものが私の手元にある。

『シルクロード詩集』の中に「盗掘」という詩がある。

天子が即位すると、盗掘団は直ちに、その日から、その天子が将来葬られるであろう想定のある墓所に向って、秘密の地下の道を掘り始めるといふ。もち

ろん古い中国の話だ。作り話にしても、私はこの話が好きだ。この話を思い出すと、いつも勇気を感ずる。私もまた掘り始めなければならぬと思う。死者の静けさと、王冠の照りの華やきを持つ何ものかに向って。たとえば、私の死後五十何年目かに向って、とある日の故里の落日の如きものに向って。

先生の「盗掘」という詩と「もしもここで俺が死んだら」の詩は、声を出して読むと、心なえたときに勇気づけてくれる私の愛読詩だったので、秋の一夜の『幻の演歌』ともいえる宝物の盗掘は、先生に最後まで告白しなかった。私は下戸なので、酔っていた他の連中は気づいていない。

先生が亡くなられたのは、平成三年一月二十九日午後十時十五分。私は『月刊 Asahi』の四月号に「井上靖さんの遺した『幻の演歌』」と題して追悼文を書いた。盗掘した詩の原石は、みんなで、「月の沙漠」のメロディで歌ったもので、『演歌』としておいた。

「私の詩では、死後五十何年目かにはやってくる、と書いていますから、あなた発表が少し早すぎるのではないですか」とお叱りを受けるかなと、宝物に合掌した。

「喜寿記念号」としていただいた『まるいてえぶる』二号。井上先生のご家族、親族による私家版の文集。巻頭に「喜寿の年」という巻頭おじいちゃんエッセイがある。その中に七十歳のときに作った歌が二首記されている。

古稀の年天山越えぬ機影一つ命にてこそただに見守る。

タクラマカンの沙を手にとり拝がみて果し終りぬ
若き日の夢。

私が『盗掘』した座興詩の中には、〈わが若き日の血の騒ぎ〉というフレーズがある。七十歳のときの先生は、自伝「私の履歴書」を『日本経済新聞』に連載。エジプト、イラン、中国を訪ね、『遺跡の旅・シルク

ロード』を刊行。ライフワークの『わだつみ』（第一、二、三部）を岩波書店より刊行と、仕事盛りだった。

書き出すときが無い。先生に最後にお目にかかった夏の日のお話は、何かにつけて聞こえてくる。「体力が衰えたからでしょうかね、この夏はことさら暑い夏だったのに、私はひどく寒かったんですね。ラクダの下着を着込み、毛布にくるまって、まだ寒い。家のものが気味悪がって、布団をはぎに来たりするんだけど。そのときに思いましたね、こういうたとは、遺族の方たちに悪くて、不遜のそしりをまぬかれないかもしれません、南方の戦線のジャングルで餓死して死んで行った兵士たちは、さぞかし寒かったんじゃないか。熱帯で暑いはずなのに、ほんととぶる震えながら、死んでいったんじゃないだろうか。私も中国戦線に従軍しましたが、いまから考えると、あの広大な大陸を、まるでアリの列に歩いているみたいなので、日本はいったい何をやろうとしていたんですかね」。

シルクロード、ヒマラヤの旅

石原國利（岩稜会会員）

今年の夏、井上靖先生の自然や山行についてのエッセー集が『穂高の月』と題して山と溪谷社より出版された。収録作品五十篇、二八四頁の文庫版である。巻末には御長男修一氏が「父の趣味」と題して一文を寄せられている。膨大多岐にわたる井上先生の作品群より分類したものだ。私にとっては初めて読む作品も多く、まことに有難く便利の一書である。

私が特に感動したのは「ヒマラヤの山地にて」と題する作品であった。初めてヒマラヤの山地に踏み入った井上先生が経験された、少年シェルパとの交流の話である。ここでは、先生の担当になったツェリン・ピンジヨ（当時十七歳、ネパール・ナムチェバザール出身）が誠心誠意、労を惜しまずサーブ（主人）に尽くす姿

が、感嘆と感謝の気持で記されている。井上先生は、現地での旅が終り、仕事から解放されたピンジヨが夜を徹して一目散、故郷へ走り帰る姿を心の中で追われている。シェルパとサーブの関係はヒマラヤ登山の大きな魅力の一つであるが、この文を読んだとき私は、先生をヒマラヤ旅行にお誘いしてよかったと、ホッとした気持になった。先生を長期間生活不自由な地に誘い出し、奥様はじめご家族、先生と親しい知人の方々に、先生が無事帰国されるまで余計な心配をかけていたのではないかと、自責の念を抱いていたのが、いちぶ赦された気持がした。

井上先生のヒマラヤ旅行の発端は、カエル会（井上先生を中心とした登山グループ）の中で、私ども岩稜

会（鈴鹿市の山岳会）の会員三名、伊藤経男、上岡謙一、

石原が、エベレストの近くで中秋の満月を見る計画を立て、井上先生にその計画を話したところ、先生が「私も参加します」と仰り実現したものであった。最終的にメンバーは、井上先生、画家の生沢朗先生、井上佳子さん（先生の次女）、私達三名の六名となった。

更に井上先生より、ヒマラヤに行く前にシルクロードのアフガニスタンに寄りたいとのご希望が出て、現地での世話、通訳として、私ども三人と親しいナジブブラ・モハバット君（通称ナジブ君）に加わってもらうことになった。ナジブ君の御父上は初代のアフガニスタン駐日代理大使で、ナジブ君は名古屋大学工学部出身である。総勢七名となった。

昭和四十六（一九七二）年九月二十四日羽田発、同二十九日までアフガニスタン、同三十日より十月十二日までネパール、同十五日までインド、ダージリン、十六日ホ



ナムチェバザールにて。井上先生と少年シェルパ、ツェリン・ピンジヨ（昭和46年10月2日）

ンコンにて解散という日程となった。アフガニスタンでの旅は井上先生の独壇場であった。先生にとっても初めての地であったが、シルクロードに関連した智識の量と、学識の深さには只々驚嘆した。全て若き日に関心をもつて吸収した智識が基礎になっているとのことであった。バーミヤン（九月二十四日）、クンドウズ（二十五日）、アムダリア河畔（二十六日）、



いざ出発、ヒマラヤへ。カトマンズ空港にて、左より石原、井上靖先生、井上佳子さん、生沢朗先生、上岡謙一さん、伊藤経男さん、ナジープ君。日本大使館・高山一義氏撮影（10月1日）

バルフ城市（二十七日）と車を走らせ、サラン峠を越えてカーブルに戻った。
九月二十九日、アフガニスタンを離れ、インドのデリーを経由して三十日にネパールのカトマンズに入った。いよいよヒマラヤの旅である。

旅行中、井上先生はいつも手に小さな手帖か、時には大学ノートを持って、ボールペンでメモを記されていた。夜も食事が終わってから、ご自分の部屋かテントの中で、メモを整理されていた。われわれ凡人組は、空港の免税店で購入した洋酒を友に、時には生沢先生をまじえて休養と歓談に時を過ごした。

井上先生はかねてより、「メモをとりなさい。書いたものは永久に残るが、記憶は消える。忘れたらそのことは無になる」と仰っていたが、今となると事実はその通りとなった。この旅で経験したこと、井上先生の折々のお話なども、あれはよかった、あのお話には感銘をうけたという思いだけが残る、その具体的な内容は思い返しても覚束ない。直後にメモしておれば……と思うこと頻りである。

冒頭で挙げた「ヒマラヤの山地にて」には、エベレストをはじめ、ローツェ、アマダブラム、カンテガ、タボツェ、クンビーラ、カンゲテ……といった山の名、ドウトコシという川の名、ルクラ（二四〇〇メートル）、ナムチェバザール（三四五〇メートル）、クムジュン（三七六〇メートル）、ホルシェ（三八〇〇メートル）といった部落の名と標高が出てくるが、いずれも井上先生にとっては初めて足を踏み入れ、目にされた景色である。それぞれが正確、適切に文章の中に配列されており、読む者にとって抵抗なく自分の心に再現される。先生が丹念にメモされた成果が見事に活かされていると思う。

このヒマラヤ旅行は、この年（昭和四六年）の五月十一日より翌年四月十日まで三三二回にわたって『朝日新聞』朝刊に連載された小説「星と祭」に急遽盛り込まれることとなり、山旅は取材を兼ねることになった。クライマックスの満月が出る場面は次のように描かれている。

戸外へ出てみると、カンテガの支稜の肩から、今まさに月が出ようとしていた。カンテガの支稜は雪がないので、真黒に見えているが、その肩の部分が際立って明るくなっている。やがて月が顔を出し始めた。

「五時五十五分」

岩代が言った。月が完全にあがってしまうには何程もかからなかった。

「五時五十七分」

二分で月はそのまうい姿全部を現わしたのであった。と同時に、右手のアマダブラムが霧の中から白い姿を現わし始めた。ほかの山は全く霧に包まれている。
（「星と祭」）

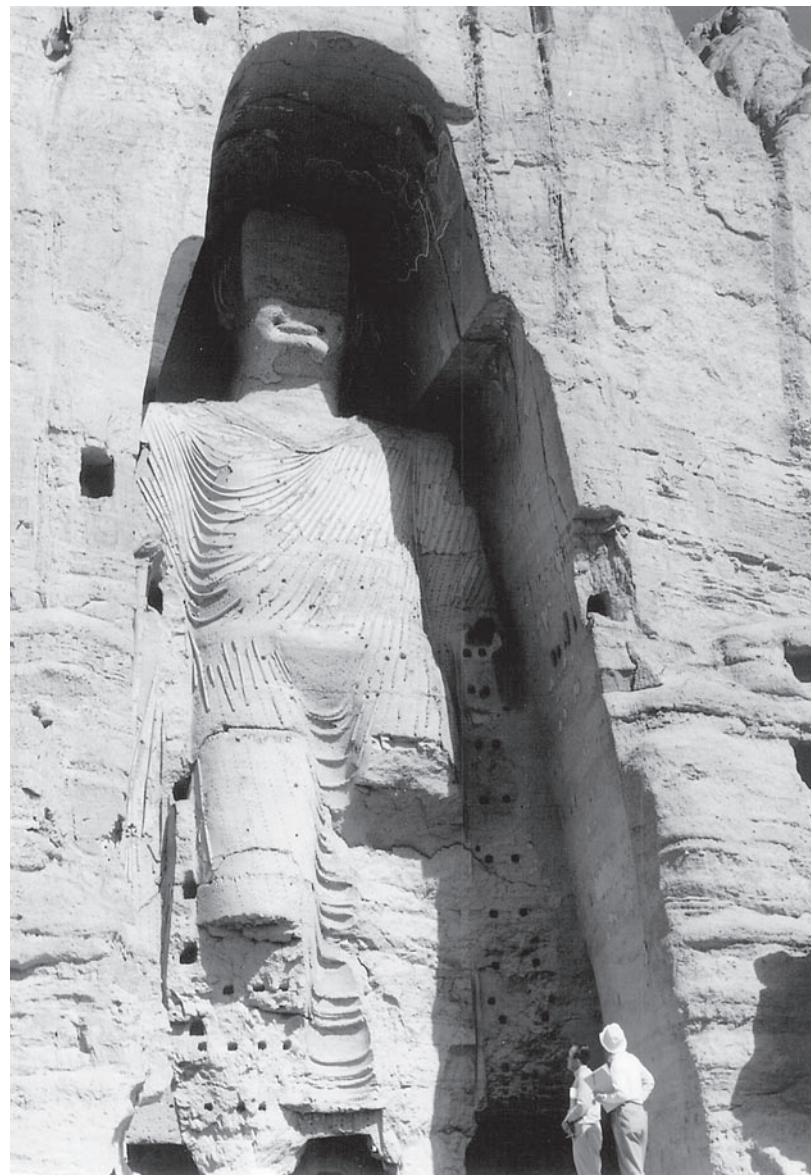
私どもが現地で体験したことがそのまま書いてある。事実の再現である。このヒマラヤ旅行から既に四十五年が経過した。井上先生、生沢先生、伊藤さん、上岡さんは天上の人となられている。私にとっては生涯を通して、望むべくもない貴重な、珠玉の日々となった。



ネパール・ジャンボチェ空港にて、くつろぐ生沢先生と井上先生（10月2日）



同じくジャンボチェ空港にて、左より上岡さん、伊藤さん、生沢先生、井上先生



バーミヤンの仏像を見上げる井上先生（左）と生沢先生（右）。仏像は破壊されて今はない（9月25日）



同じくクムジュンの僧院にて、台帳に記帳する井上先生（10月3日）



エベレストビューホテルにて、山々を眺める井上先生。霧が晴れると、左奥にエベレストがその威容を現わす（10月3日）



カンテガの支稜からあがったヒマラヤの満月。左は雪に輝くアマダブラム（10月3日）。作品「星と祭」では、なぜか月の「右手」にアマダブラムが姿を現わす



クムジュンの僧院にて、イエティ（雪男）の頭皮を見る伊藤さんと井上先生（10月3日）

業績にも品格

曾根博義氏を悼む

藤澤全（元日本大学教授）

ここ数年、詳しい様子がわからなかった。訃報に接したときは、驚きのあまり天を仰いだ。平成二十八年六月十九日午前八時三十九分、曾根博義氏は、間質性肺炎のためさいたま市大宮の病院で死去された。七十六年四ヵ月十六日のご生涯であった。現今の平均寿命からみても早すぎたと思う。

告別式への参列となったが、斎場の与野ホールは大勢の人であふれ、芳しい花の香りに包まれていた。無宗教形式なので読経も焼香もなく、黙禱に始まり、たくさんの思い出の写真が大画面に映し出されて、「お別れの言葉」が親しい友人からあった。献花・弔電奉読のあと、ご挨拶される実兄の曾根邑志氏さとしの傍で、通夜では式辞を述べられた令夫人侑子様が頭を下げてお

られた。晴れて蒸し暑い昼下がり、黒塗りの車に移された曾根さんを見送り、お別れとなった。会者定離。「逝くものは斯くの如きか、昼夜を舍あかず」：身にしてみる。

かつて訊ねたことがあった。――「水産庁にいらした曾根徹という方、ご親戚か何かですか」と。同庁調査研究所内発行の曾根徹追悼集『思い出』に、井上靖さんが「弔辞」を寄せ、「曾根さん。あなたはふいに私たちの前から姿を消してしまいました。（中略）その替り、私たちの心の中に生きることになりました」と書いていたからである。結果は無縁とわかった。それだけのことはあるが、しかし今、前記の「弔辞」の一文は、日本大学教授をながくつとめ、また外部で

は、日本近代文学会代表理事・日本近代文学館常務理事などにも就いた故人に捧げる、弔意の表現としても適っていることに気づくのである。

*

曾根さんは、研究者としての道を、およそ三つの段階を踏んで駆け抜けたように映る。すなわち第一段階は、茶の香り立つ静岡の生地を離れ、東京大学経済学部卒の切符を官界・経済界で用いず、まずは論文『伊藤整の方法』論』を書いて群像評論新人優秀賞を得、これを足掛かりに文学領域へと転身。日本大学芸術学部の非常勤講師として教壇に立ち、のちに作家となる吉本ばななを育てた。そして三十二歳で文理学部国文学科の専任となり、間もなく刊行をみた新潮社版『伊藤整全集』全二十四巻を活用して大著『伝記 伊藤整―詩人の肖像―』（六興出版）を上梓し、さっそうとアカデミズムの中心へと進んだ。

次が、四十代初めから六十の齡よわいとなるまでの約二十年間で、この第二期はさまざまに花開くが、とりわけ

作家（井上靖）に関わるところが著しい。それも企画・編集・解説等に出番を得ていたというべく、角川の『鑑賞日本現代文学 井上靖／福永武彦』、小学館の『群像日本の作家 井上靖』、『新潮日本文学アルバム・井上靖』などと続き、ついに新潮社の『井上靖全集』全二十八巻別巻一卷という大仕事を成し遂げた。日を経て開催された、世田谷文学館と神奈川近代文学館での井上靖展、また至文堂の「国文学 解釈と鑑賞」別冊「井上靖―詩と物語の饗宴―」の編集にも、曾根さんの力が及んでいる。「新潮」に寄せた『蒼き狼』論争をめぐって―井上靖の歴史小説と大岡昇平の歴史小説論―は、彼の批評家・文学史家としての一面をも感じさせるものであった。

そして、還暦の頃以降が第三段階となるが、最後の五年間が希薄なので、事実上、日大文理学部教授を退く古稀までの動きとなる。この炎のような十年間は、さらに広く視座しての活動の集大成へと向かっていて、特殊な雑誌に光を当てたり、文学史や批評史の分野へと進出。単独もしくは共同で結果を残した。雑誌「変

態心理」解説・総目次（不二出版）、『編年体大正文学全集』第十二卷（ゆまに書房）、『文芸時評大系』昭和篇Ⅱ・Ⅲ（同）、『日本文芸史』第七卷・現代Ⅰ（河出書房新社）、小林多喜二『老いた体操教師 瀧子其他』（講談社文芸文庫）など。このあと「日本古書通信」に連載欄をもつが、数回で筆が途切れた。

まだまだたくさん業績があり、このように挙げただけでは十分ではないのだが、ここでは『全集』の編纂という快挙に注目し、少しく井上靖さんに近づけて点灯、その灯りに照らし出される範囲を広くとって掲げ出す形をとった。——如上の結果でもって言えることだが、曾根さんの人生の充実期は、前記のうちの第二段階にあつたに相違なく、あとの体調問題を抱えたなかでの頑張りも凄かった。その見事な業績に敬意を表したい。令夫人の悲しみはいかばかりか……。学界にとつても大きな損失である。

*

銀河の彼方へと託せる手紙——喜寿を目前にして立たれた曾根さん、本当にお疲れさまでした。井上靖さんは二十五年前に白玉楼中の人となりました。いま、一番きらめく星のあたりで出会っておられるのではないでしょうか。井上作品の筋上で、かなりの人員が天界へと移っています。そうしたキャラクターたちとの対面が実現するといいですね。どうぞ存分にご休息ください。

在りし日の曾根さんを偲び、ご冥福をお祈りします。

合掌

鳩のおしらせ①

◎井上靖記念館（旭川市）

【企画展】

○「井上靖と西域紀行Ⅱ『敦煌』」展

平成二八年一〇月一五日～二九年一月一五日

井上靖の敦煌に関する紀行文や詩、作家自身が撮影した写真、取材ノート、自宅に所蔵され興味を持って読んだ書籍等を展示し、「小説『敦煌』誕生の背景」や「井上靖の敦煌に対する思い」を伝えます。

【文学講座】

○「井上靖と東京オリンピック」（講師・片山晴夫氏）

平成二九年一月二八日 一三時三〇分～一五時

井上靖が東京オリンピックについて書き残した随筆を読み解きながら、来る二〇二〇年の東京オリンピックをどう見るか考えます。

問い合わせ…井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六―五一―一一八八

◎井上靖文学館（長泉町）

【企画展】

○「真田軍記」展

平成二八年九月一日～二九年三月一四日

真田父子と彼らを取り巻く人々を描いた短篇集『真田軍記』（昭和三〇年刊）の執筆資料を展示し、その背景に迫ります。また、真田に関わる他作品、「風林火山」「本覚坊遺文」「淀どの日記」などの歴史小説を紹介します。

展示①「『真田軍記』の世界」（古地図・挿絵・相關図・年表から、作品をわかりやすく解説）

展示②「戦国時代の作品群」（歴史は名もなき人たちによって作られるという井上の歴史観を、軍師や弟子の視点によって描かれた作品から紹介）

問い合わせ…井上靖文学館

静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平） 五一―五七

☎〇五五―九八六―一七七一

野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

隣ムラ・長野へ、長野川へ

井上靖が幼少年期を過ごした現伊豆市湯ヶ島は、下田街道ぞいでムラの中心部だった。役場や学校、温泉宿、商店などが集まり、世間との接触も他の集落よりは多かった。湯ヶ島には狩野川が流れているのだが、湯ヶ島の北のはずれで狩野川の右岸に支流長野川が合流する。長野川は天城山塊の中にある八丁池（二二五メートル）の北側斜面を水源として長野部落の中を北西に向かって流れている。湯ヶ島の中心地は標高二一〇～二二〇メートル、標高四〇〇メートルほどの山を隔てて東南に隣接する長野部落の中心地は三一〇メ

ートル、南にカーブする谷の一番奥に当たる^{ほうきばら}箒原という小字は三五〇～三八〇メートルである。長野の中心部から箒原に向かって進むと長野川右岸に拓かれた美しい棚田が見える。湯ヶ島至近の隣の谷なのに、長野には山のムラの匂いがあり、古層の民俗を色濃く残存させている。作家が少年時代を過ごしたころにはその色あいはさらに深かったにちがいない。

その長野という地名や長野川が『しろばんば』や『幼き日のこと』にたびたび登場する。

短篇「夏の焰」に登場する「N川」も長野川にちがいない。長野や長野川 of 自然、長野や長野川を舞台としてくり広げられていた民俗・民俗的な遊びなどが作家の感性や心性に多様な光を当て、陰翳をつくりだし

ていたことは確かであろう。ここではまず、井上作品の一部を緒として長野や長野川ぞいにくり広げられた民俗に錘鉛をおろす。さらに関連事項や比較資料も示してゆく。そして、作家の心性を探るところにも繋げてみたい。

粘土探索行

「その日も、洪作はいつものように御料局の門の前で、部落の子供たちと遊んでいた。遊ぶと言っても、洪作や幸夫は専ら^{もっぱら}命令する方の側で、下級生たちを長野部落まで駆けて行かせ、部落の入口にある川つぶちの崖から粘土^{ねんど}を採って来させていた。次々に子供たちはこの粘土採りのマラソンに出發して行った。これは幸夫の発案に依るものだったが、子供たちにマラソン競争をさせるのが目的ではなく、粘土を採って来させるのが幸夫の狙いだった。」（『しろばんば』——ここで対象となった粘土のありかは上級生から下級生までの誰もが知っている場所だった。普通の土とは異なり、

キメが細かく凝縮力もあり、意のままに形を変えて造形意欲を満たしてくれる粘土は、子供たちにとって魅力と価値があるものだった。粘土が採れる場所は数箇所あり、中には色や質の異なる粘土が採れる所、秘密の場所もあった。ランクの高い採取場の中には下級生には知らされていない秘密基地めいた場所もあった。

「……三男の叔父（私より十歳ほど年長）は粘土のあるところを発見するのうまかった。——巾着淵（長野川）の上に、崖のくずれたところがあるだろう。その裾の大石のあるところに、黄色の粘土がある。こんど行ってみな。だが、人に言うなよ。お前はすぐ人に言うからいかん。いつもそんなことを言った。しかし、粘土のある場所を他人に披露するのは、三男叔父自身であった。せがまれると、結局のところは、他の子供たちにも教えてやった。粘土は子供たちの財産であった。三男叔父から秘密の粘土の在場所を聞いた時は、急に資産家にでもなったようなゆたかな思いを持ったものである。」（『幼き日のこと』括弧内は筆者による補足）——粘土のありかや、価値基準、粘土の扱い方な

どは地域の子供集団の中で伝承されてゆくものだった。粘土は時代と地域を越えて少年たちを魅了する宝物の一つだった。平成十二年、筆者が担当していた近畿大学文芸学部民俗学ゼミナールで、学生たちに少年時代の秘密基地体験を発表させたことがあった。当時三年生だった野田郁夫君（昭和五十四年生まれ・兵庫県宝塚市高司在住）は、粘土の採れるところが秘密基地だったと語った。秘密基地の遊びは、ランク付け、比較を伴うことが多いのだが、野田君たちは以下に示す順序で粘土のランク付けをして、競いあい、誇りあったのだと報告した。一位〓アカネン（青粘土）↓二位〓アカネン（赤味を帯びた粘土）↓三位〓クロネン（黒味を帯びた粘土）↓四位〓濃茶↓五位〓薄茶――。

長野における粘土採取の場所、および、粘土にかかわる伝承について浅田喜朗さん（昭和十五年生まれ）は次のように語る。①オニ石（湯ヶ島・長野境の長野川左岸斜面にある石）の上手の崖。鬼石は、オニシ・オニシさんとも呼ぶ。長野の門番石、下の方から長野に入ろうとする邪悪なものを防いでくれた石だと伝え

られている。『しろばんば』で、幸夫に命じられて下級生たちが粘土を採った場所は、このオニ石上手の崖だと推定される。②長野の一番奥の小字、箒原の向かい、長野川左岸の梅の木沢。ここに青白い粘土の出る場所がある。喜朗さんは、少年のころ、ここで粘土を採って夏休みの提出作品として粘土細土で「手」を作ったことがある。③箒原のムラから一キロほど遡上したところにワサビ田がある。その右手上方に石休み場と呼ばれているところがあり、そこで粘土が採れた。左の上手にカモシカボラと呼ばれる沢があり、そこでも粘土が採れた。

「ワサビは粘土のあるところでは栽培できない」と伝えられている。粘土質の地は水捌けが悪いのでワサビ栽培には適さないものである。しかし、ワサビ栽培にとって粘土は必要なものだった。ワサビ田の漏水防止に粘土が役立ったのである。粘土とセメントを混ぜ、石積み漏水管所につめたのだった。喜朗さんは、「粘土の出るところからは金も湯も出る」と、いかにも伊豆らしいこの土地の伝承を語る。

湯ヶ島の少年たちも、長野の少年たちも、学年が進むにつれて長野川ぞいに奥へ奥へと粘土を求めて探索・冒険の道を進んだのである。

『夏草冬濤』の中に、冬休みを迎え、洪作が湯ヶ島に帰省する部分がある。帰った翌日、洪作はなつかしい長野川の「へい淵」へ向かう。そこで、洪作は、秘密裡に粘土採りに向かう三人の子供たちに出会う。洪作は、自分の知っている秘密の場所を教えることを交換条件にして子供たちについてゆく。子供たちが粘土を採取し、それを水で練る場面などが描かれている。

長野に「猿面さるめんの家」と呼びならわされている旧家がある。猿面の家の裏は長野川右岸に



写真① 猿面さるめんの家（浅田ます家）遠望（静岡県伊豆市長野、平成28年1月）

面した崖で、その崖下に「比丘尼びくにの穴」と呼ばれる洞穴がある。喜朗さんによると、この洞穴は秘密の場所です、度胸試しなどに使われたことがあるという。ここから粘土が出たのだという。「猿面」とはいかにも

不思議な屋号的な呼び名である。長野の人びとは次のように語り伝えている。——昔、左甚五郎ひだりしんごろうがこの家に滞在したことがあった。甚五郎はその謝礼として猿の面を彫ってこの家に置いて行った。それからこの家は「猿面」と呼ばれるようになった——。写真①は猿面の家の遠望である。向かって左側（南西）に天城山塊から吹きおろす風を除けるためのシセキ（屋敷林）がある。平成二十七年に萱葺き屋根がトタンに覆われたのだが、それ以前は萱葺根が古色を示していた。

私が最初に猿面の家を訪れたのは昭和六十二年一月十五日、小正月のことだった。その時、この大きな家を守っていたのは女主人の浅田ますさん（明治三十九年生まれ）だった。猿面の家では、小正月行事をしっかり伝承・実修していた。写真②に見るように、玄関口の萱葺根の下側のお厚い萱に削り掛けが挿されていた。長さ七〇センチ、径二・五センチ、削り房の部分四五センチほどである。素材はヌルデの木である。皮を剥いだヌルデの白さが目につく。この地では、この削り掛けのことを「削り花」と呼んでいる。満月を以



写真② 小正月の削り花（静岡県伊豆市長野、浅田ます家、昭和62年1月）

野の浅田武さん（明治三十二年生まれ）も小正月には心をこめて作った削り花を飾っていた。削り花は小正月に飾ってから一月二十日の二十日正月の朝まで置き、この日にさげて燃すものと語っていた。簗原の浅田重子さん（大正八年生まれ）も小正月には削り花を飾った。さらに、削り花とは別に「門入道かどいろうどう」も飾った。門入道とは、削り花と同じヌルデの木で、薪状の木の一部を削って白い木地を出し、そこに墨で人面を描いたものである。母屋の玄関、蔵の入口、隠居（別棟）の入口に一対ずつ飾った。門入道の頭の部分には小豆

って定めた小正月は、元旦を中心とした現在の正月、即ち大正月に比べて様々な点で古層をまとった正月だと言えよう。写真②の削り花は、いかにも小正月の神を迎える際の神の目印にふさわしい印象を与える。家に神を迎える古い形である。このような削り掛け、削り花が、紙を使った御幣の粗型であることはまちがひなからう。こうした削り掛け・削り花と同類のものが「イナウ」と呼ばれ、アイヌ文化の中にあることは広く知られているのだが、最近では、東南アジアにも同類のものがあると報告されている。

写真③は猿面の家の座敷に吊られていた年神棚である。竹筒の花立てにも、写真②の削り花とは異なる形の削り花が立てられている。この削り花は、正月用の松を除いて小正月用に新たに飾られたものである。それにしても、写真②③の削り花は、古層の信仰的造形物であり、優れた民俗意匠をとどめるものだと言えよう。

このような削り花は猿面の家に限って飾られたものではなく、この地方の一般的な小正月民俗だった。長



写真③ 年神棚に飾られた小正月の削り花（同上）

飯を供えた。

長野では、小正月とは別に、「コト八日」とも呼ばれる、二月八日と十二月八日の行事も盛んだった。武さん、八重子さんはともにこの行事にも力を入れていた。『幼き日のこと』の中に、「傘のお化け」と「ひとつ目小僧」のことが出てくるのだが、「コト八日」の行事は「ひとつ目小僧」の伝承とかかわるものである。長野ではひとつ目小僧のことを「目一つ小僧」「目一つ」とも呼ぶ。この行事について最も詳細に語ってく



写真④ コト八日の柵の枝を挿した目籠と米の研ぎ汁を入れた桶（静岡県伊豆市長野小字箒原、浅田あい家、昭和62年2月）

れたのは箒原の浅田あいさん（明治三十八年生まれ）だった。あいさんの語りを以下に示す。——二月八日と十二月八日には目一つ小僧がくる。昔、ある人が二月八日（十二月八日も）に風呂に入っていたところ、目一つ小僧がきて風呂桶ごと担いで行こうとした。その人は、裸のままそばに生えていた柵の木の枝につかまって助かった。こういうことがあったので、二月八日と十二月八日には風呂に入ってはいけないと言いつづけている。また、柵の木で助かったので、この日は柵の枝を門口に挿して、目一つ小僧除けとする。柵はただ挿すだけでなく、目籠に挿して、その目籠を玄関先に吊るす。その下には米の研ぎ汁を入れた桶を置く（写真④）。目籠の目が多いことと、それがまた桶の研ぎ汁に映って倍になっているのに驚いて目一つが逃げ出すためだと伝えている。それとともに、丸大根に墨で目玉を書

きいたものも玄関口に飾った。また、この日は赤飯を炊いて握り飯にし、囲炉裏の鉄器で焼いて、唸りながらこれを食べるものだとした。目一つに病人がいると思わせるためである。そして、最後には、囲炉裏の炬燵に目一つ小僧のぶんとして赤飯の握り飯を置いた。目一つ小僧がそれを見て、握り飯の小豆の目があまりにたくさんあるので驚いて逃げ帰るのだという。目一つ小僧は、十二月八日にその家の様子を帳面に付け、その帳面を塞の神に預けておき、二月八日に受取りにくる。それで、目一つがその帳面を塞の神から受取ると困るので、一月十五日のドンドン焼きの火で塞の神を焼くのである——。ドンドン焼きにおける塞の神焼きについては『伝書鳩』第十五号で記した。

さて、二月八日、十二月八日に風呂に入ってはいけないというのは、この二つの「八日」が物忌みの日であることを示している。旧暦十二月八日から二月八日の間は太陽の力が衰える寒い期間である。十二月八日は太陽の力が衰微する季節の入口の日であり、二月八日は太陽が衰微する季節を脱し、万物に光と活力を与

え始める日である。「目一つ小僧」「一つ目小僧」は光の喪失者、光を求める者の象徴である。二つの八日に目の多い目籠や目の多い赤飯の握り飯、大まなこの大根を顕示するのは、太陽の多光、太陽の力復活の予祝である。光を求める目一つは、じつは多目、多光の顕示を家ごとに確かめ、その顕示物を見て安心して帰ってゆくというのがこの行事の骨格である（野本寛一『季節の民俗誌』玉川大学出版部・二〇一六年）。

井上靖の作品からはやや離れたのだが、湯ヶ島の隣接集落、長野に、これだけ深い民俗世界が手のとどく過去まで生きていたということを語ったかったのである。作家の感性や心性の中に、こうした民俗世界からじつに様々なものが流入していることを考えてみたい。

生きものへの眼ざし

子供たちにとって小鳥を捕獲するということは極めて魅力的であった。その方法には鳥籠と罟とがあった。「毎年のことだが、本当の冬の寒さがやって来るこの

頃から、子供たちの間には小鳥を獲るわなが流行し始める。小鳥はひよどりの種類が多くやって来た。村中到處に、ひよどりの姿は見られたが、殊に多くその姿を現すのは、人家の跡絶えた長野川の溪合であった。洪作は学校から帰ると、二、三人の仲間と長野川に沿った段々畑を降りて行って、そこにひよどりのわなを仕掛けた。一つのわなを作るにはかなりの時間と労力を要した。よくしなう木の枝を切つて来て、それを冬枯れた田圃の中に差し込み、地面から出ている部分を折り曲げて、それをバネとした。……仕掛の木切れが小鳥の体を獲え押える仕組みになっている。獲えられる小鳥は例外なく死んでしまうので、その意味では残酷なものであった。小鳥の死刑台と言つてよかった。」「(しろばんば)」

『幼き日のこと』には次のように描かれている。「子供たちは、専ら鳥鷄に希望を託しているが、十八、九歳の少年たちになると、もつと確実な罾の方に転向する。冬枯れた田圃の、鴨や鵝白の来そうなところに罾を掛けに行く。この方は弾力のある木の枝を切つて

来る労力も要るし、罾を仕掛けるには、それ相応の技術も要る。幼い子供たちは専ら見物の方に廻る。少年たちの中には、罾をかける名人が居る。そんな少年が罾をかけた田圃に出て行くのを知ると、子供たちはひと固まりになつてついて行く。——餌をとつて来い。

罾作りの少年が言う、子供たちは四散して、川向うの山に青木の赤い実を探しに行く。青木の実が見付からぬ時は万両の赤い実を使った。幼い者たちにできるのは、これぐらいのことしかない。しかし、その赤い実を探すが、何と生き生きした作業であつたことか。——

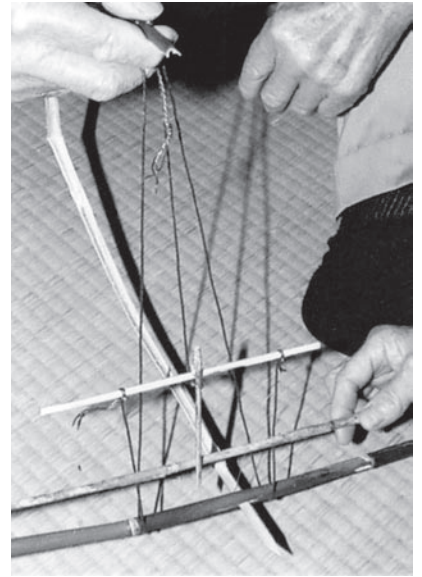
長野篠原の浅田喜朗さんも、冬になると盛んに鳥ワナ(罾)を掛けた。ワナには、井上作品に登場する罾のように直接地面に設置するものと、地面よりも高いところに仕掛けるものとがあつた。前者をデワナ(地罾)、後者をタカワナ(高罾)と呼んだ。タカワナをタカトリワナと呼ぶこともあつた。高から鷹を連想してのことと思われる。タカワナはバネ木とは別に、長い木の枝を彎曲させてその両端を地面に

挿し、地上五〇センチほどの位置に横木を固定させ、その横木をベースにして罾を仕掛けるもので、高度な技術を要する。小鳥を誘引するための餌は井上作品にも描かれているが、喜朗さんは稲の落穂と南天の実を使った。タカワナの場合は落穂を掛ける形をとつた。獲物はシヨット(鰯白)・コジュケイ・ヒヨドリ・ハトなどだった。

静岡県牧之原市松本で少年時代を過ごした筆者も、冬には鳥罾に熱中した。旧菅山村にはタカワナはなく、井上作品と同じデワナだけだった。その鳥罾の呼称は「クビッチョ」だった。クビッチョという名称は遠州地方から三河地方で用いられ、長野県の一部でも使われた。仕掛ける場所は、湯ヶ島とは異なり、里山の中だった。したがって、バネ木は山の中に生えている櫟の木のコバエなどを使うことが多かったが、地形によつては井上作品同様伐り出したバネ木を地面に挿して使うこともあつた。餌には南天の実・梅檀の実・精白された米(少量)を使った。餌の囲み覆いは主として椎の木の枯枝の先を使った。

「ある朝、洪作は幸夫と二人でわなを見に行った。川縁の崖の上に仕掛けた幾つかのわなを順々に見て行ったが、その中の一つに一羽のひよどりがかかっていた。ひよどりは首を締め木に押えられ、小さい体を横倒しにして、無慚な尻をさらしていた。」「(しろばんば)——ここにあるように、罾の首尾を見とどけにゆくのが何よりも楽しみだった。罾の場所に近づいてゆき、バネ木の先端が、仕掛けた時に比べて高くあがつていれば獲物がかかっていることの証しだった。バネ木が高い!! 胸をときめかせながら前面にまわってみると掛かっているのは鳥ではなく鼠だった、という苦杯を何回も舐めた。

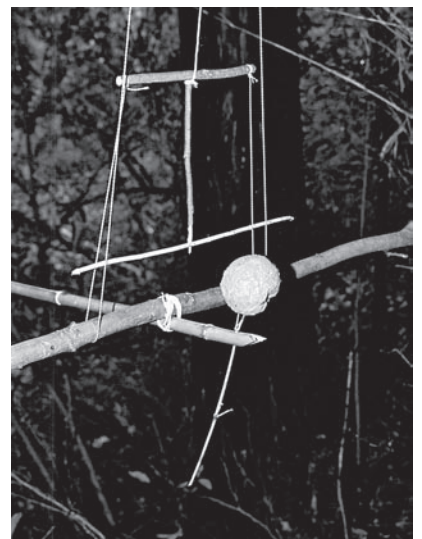
宮崎県東臼杵郡椎葉村ではこのような鳥罾のことを「クビチ」と呼ぶ。『日本国語大辞典』(小学館)にも「くびち」の項があり、【葎・撻】「名」(くひち(くいち)とも) 獣を捕えるしかけ。くいつ。」とある。「クビチ」は罾の形態・機能と併せて考えてみると、「首打ち」が「くびち」と変化したものではないかと考えられる。してみると、「クビッチョ」も「クビチ」



写真⑤ クビチの模型（宮崎県東臼杵郡椎葉村松木）

「クビッチ」からの転と考えられる。ところで、椎葉村のクビチには、地罾と高罾とがある。写真⑤はクビチの原理を示す模型であり、写真⑥は椎葉英生さん（昭和十六年生まれ）が山中に仕掛けた空中クビチである。

『しろばんば』で洪作の言う「締め木」は写真⑥の上の横棒に当たる。二段目の細い横棒は、バネ木と連動する縦の細い棒を止めている止め木である。鳥がこの止め棒に止まってみかんを啄（つば）もうとすると、鳥の体



写真⑥ タカワナに相当する空中クビチ（同上、椎葉英生さん仕掛け）

重で止め棒がさがり、縦棒の先がはずれてバネの力で締め棒が瞬時に引かれ、鳥の首は長い横棒（台木）との間に挟まれる。地罾の場合、台木は締め棒よりやや長めにしてその両端を鉤型の又木を地面に打ち込んで固定しておく。

この罾の中心は細い縦棒で、この縦棒と横の止め木、締め棒を一括して椎葉村では「チンチロ」「チンコ」などと呼ぶ。静岡県榛原郡川根本町では「チンカラ」と称している。縦棒を男根に見たて、チンコ・チンチ

ロ・チンカラなどと呼んでいたものが、これを中心としたセットの呼称に拡大したものと思われる。鳥を絞捕するこの罾にとって、胤糸のような強い糸または紐は不可欠だった。筆者の少年時代、冬にはだれもが胤糸と肥後守（ナイフ）を申し合わせたように持ち歩いていた。

さて、『しろばんば』では罾にかかったひよどりの屍が思わぬ展開を呼ぶことになる。「女の子供たちはすぐわなを取り巻いた。あき子も息を詰めたような表情で、ひよどりの骸（むくろ）を見守っていた。……洪作は、突然、烈しい泣き声が起るのを聞いた。……泣いているのはあき子であった。」——さらに詳細な心理描写が続き、次のような結末に至る。「この事件があつてから、洪作は小鳥のわなを作ることをやめた。わなのことを思うと、すぐあき子の烈しい泣き声が耳についた。」

罾にかかった鳥については『幼き日のこと』でも次のように描かれている。「罾にかかる鳥は頬白か、鶉であった。しかし、私は一度罾にかかっている小鳥の

無惨な死体を見たことがあり、それ以来どうしても小鳥というものを食べることはできなかった。時には小鳥の焼いたのを、近所の家や、本家から貰うことがあった。そんな時、——小鳥を食べると歯が丈夫になるというのに、困ったことだ。おかのお婆さんも、本家の祖母も言ったが、私は自分が小鳥を食べない理由を説明しなかった。小鳥が可哀（かわい）そうだと言うのは、何となく女々しく、恥ずかしいことに思われたのである。」

鳥罾、小鳥の死に対する「洪作」「私」に仮託されている作家の心意・心性を探る上でも、また、作家をとり巻いていた民俗世界を細かく理解するためにも、ここで関連的に見ておかなければならないことがある。

「近所の農家に私より三つか四つ年長のタダちゃんという子供があった。栗の木の葉が繁（しげ）っている頃のことであるから、八月頃のことであつたらうか。タダちゃん（栗の木によじ登ってテグス虫を捕えて来ると、それを殺して、体内からテグス糸を取り出した。テグ

ス虫というのは栗の葉を食べている毛虫で、親指ぐらいの太さで、二寸ぐらいの長さがあつたように記憶している。」「(幼き日のこと)」

ここに登場するテグス虫とは、ヤマユガ科の蛾の一種であるクスサンの幼虫で、シラガタロウ(白髪太郎)と通称されている。シラガタロウと呼ばれるゆえんは、体が白味を帯びた繊毛に蔽(おほ)われているからだ。栗・クスギ・クスなどの葉を食べる。栗毛虫とも呼ばれる。静岡県浜松市天竜区水窪町大沢の別所賞吉さん(昭和八年生まれ)は、この虫には枋の葉を喰う害虫的側面があると語り、成虫を「トチノキチヨウコ」と呼んだ。そして、幼虫の名は「白鬚童子(しろひげどうじ)」だという。この呼称には白髪太郎との共通性が見られる。

横瀬夜雨(やう)作詞の童謡『にしゃどつち』(与田準一編『日本童謡集』岩波文庫)に白髪太郎が登場する。へ白髪太郎のあまんじゃく 網の牢屋に押し籠められた……へ西はどつちと聞いたれば 西はあつちと振る頭——大変おもしろい童謡である。一体なぜ白髪太郎は天の邪鬼なのか、「網の牢屋」とは何なのか——。網

髪太郎が現代人には想像もできないほど身近な存在であつたことがわかる。総じて人と昆虫との距離は時を遡上するほどに近かつたのである。

「私は今でも毛虫は嫌いだが、幼い頃はもつとひどかつた。蛇よりも臺(がま)よりも毛虫の方が嫌いだつた。だから、タダちゃんのテグス取りの作業は、いつも他の子供の頭越しに眺めた。毛虫も嫌いだし、それを殺すのを見るのも厭(いと)だつたが、その不気味な体内からテグスが出てくるのは不思議でもあり、そのテグスを自分のものとするタダちゃんが羨(うらやま)しかつた。テグスといつてもせいぜい一尺か一尺五寸ぐらいの長さの半透明の糸で、何匹分か集めて酢につけてから、それを結び合わせて長くした。魚を釣るには専ら(もっぱ)これが使われた。村にはテグス糸を売っているような店はなかつたので、テグス糸を手に入れるには、栗の木の子毛虫の体内から取り出す以外仕方なかつた。」「(幼き日のこと)」

ここでは特に傍線部(筆者)に注目したい。栗毛虫をめぐる複雑な心境が示されているのだが、とりわけ、栗毛虫を殺すことへの嫌厭感に目をとめておきたい。

の牢屋は白髪太郎の繭(まゆ)を指している。それは、網目状をなしており、内部の蛹(さなぎ)を透かして見ることができるところから「透かし俵」と通称される。白髪太郎が栗・梅・枋などの葉を喰う害虫的側面に加えて、籠るべき密閉空間を以つて繭の通念とするのに対して、透かし俵を作りその中に入るものは天の邪鬼だと見たたのである。頭を振る生態をふまえて「西やどつち」という問いかけをして答えを求める遊びが、横瀬夜雨の育つた茨城県に伝承されていたことがわかる。湯ヶ島にほど近い伊豆市原保には子供たちが螻蛄(けら) (直翅目ケラ科の昆虫)を捕え、手に持つて行う次のような遊びがあつた。螻蛄が、発達した前肢を掲げて動かす習性を、ものの長さを測る様に見たてて次のような言葉を唱して遊ぶのである。「ケラケラ オテントサン 拝め」「ケラケラ お前の茶碗はどのくらい」「ケラケラ 俺の茶碗はどのくらい」——(伊豆市原保・石井しずさん・明治三十九年生まれ)。

井上作品にテグス虫が登場し、また、このような童謡が誕生し、記録されていること自体、クスサン・白

このことは次に繋がつてゆく。

「私は山村に育っているのに、殆ど(ほとんど)魚釣りをしたことはなかつた。釣りは、毛虫を怖がらない子供たちだけに許された特権であつたからである。」「(幼き日のこと)」

毛虫に対する嫌悪感、その毛虫を殺すことへの嫌厭感が、釣りをしないことへと連鎖してゆく様が描かれている。この流れはさらに続く。

「テグス虫のことを思い出すと、すぐタダちゃんの顔が浮かんで来るが、それと同じように、蟹(かに)うけ」と言うと、私より五つ六つ年長の本家の五郎さんという若い叔父の顔が浮かんで来る。蟹(かに)うけ、というのは蟹獲り用の竹で編んだ大きな籠(かご)のことで、蟹がはいると、再び出られないような仕組に編まれている。新宅という屋号の家の友達という人が、蟹(かに)うけを編む名人で、蟹を獲るには友達にその籠を編んで貰わねばならなかつたが、五郎さんの方は、それを川に持って行って、蟹のはいりそうなところに伏せておく名人だつた。大体に於て、七月から十月までぐらいが

「蟹うけ」の時期であった。五郎さんは夕方「蟹うけ」を伏せに行き、翌朝それを引き上げに行った。私たちはめったに獲ものを貰うことはなかったが、伏せに行ったり、引き上げに行ったりする時はよく同行した。上り蟹の時は「蟹うけ」の中に蚕の蛹さなぎを入れて、淵に投げ込んだ。その時期がすんで、下り蟹の時になると、餌は入れないで浅い瀬に伏せた。……おかのお婆さんは、本家へ行っても、蟹は食べてはいけなかった。川蟹に寄生虫が居ることを知っていたのである。」「(幼き日のこと)」

ここでいう「蟹」は、十脚目イワガニ科の中型のカニ、モクズガニである。おかのお婆さんの説く通り、肺吸虫はいきゅうちゅうの中間宿主である。狩野川水系ではモクズガニ漁が盛んでこれを食べる伝統がある。八木洋行氏は湯ヶ島の小川勝記さん(昭和六年生まれ)からの聞きとりにもとづいて次のように記している。「湯ヶ島ではカニウケで捕る。だからたいいの家ではカニウケを一つや二つ持っているという。小川さんのカニウケは女竹めだけを丸のまま使っている。真竹を割って使う場合

の丸山神社の祭日にカニ汁を食べる習慣があったという。

さて、ここまで自伝的井上靖作品を緒として、鳥罌、テグス虫から釣りへの連鎖、モクズガニ漁などについて見てきた。その通覧において、他の少年たちや土地の習俗に比べて、「洪作」「私」、そこに投影されている「少年井上靖」は、その性情として狭義の「生きもの」に対するやさしげな眼差しを持っていたことに気づく。いわゆる「殺生」を好まぬところがあつたと見ることができそうである。このことは、義祖母の影響だと見ることもできそうだが、そう断定することはできない。例えば、おかのお婆さんは不殺生戒を厳かに守った人だとは言い難い。それは、『幼き日のこと』の随所に読みとれる。——数えるほどではあるが毎年貰った「猪肉」を食べているし、本家でつぶした鶏肉も食べている。また、先に引用した通り、おかのお婆さんは本家の祖母とともに、「私」に焼いた小鳥を食べることを勧めている。蟹の禁食も別な角度からのも

もあつた。カニウケの長さは一メートル二〇センチ。最大径四〇センチ。三〇センチほどのカエシが内部につく。秋口九月から十一月までは流れの脇に口を上流に向けて仕掛ける。晩秋の下りガニはとくにうまくいった。春から夏場にかけては夜に川を上るので、カニウケの口を下手に向ける。伊豆半島では「ズガニ汁」がよく食べられている。まずズガニ(モズガニ)の足とハサミ、それに身から甲羅を外し、蟹味噌も別にしておく。足、ハサミ、身を鉋かたで叩く。カニを搗き潰す専門の臼を持つ家もある。叩いたカニは湯に入れ、ひと煮立てしたら味噌漉しに通して殻をとり去る。このカニの出汁だしがきいた汁に味噌を溶き、蟹味噌を加えればズガニ汁になる。ズガニ汁は、晩秋のご馳走だった。夕方になると、あちこちの家から、「トンコトンコ」とズガニを叩く音がして、それが谷間の村に響くのは幸せな夕餉ゆうげの音だったという。……」(野本寛一編『食の民俗事典』移風舎・二〇一一年)——湯ヶ島の宇田晴子さん(昭和二年生まれ)は、包丁の背で叩き、箆ざるで濾して汁を取ったという。伊豆市原保では十月十五日

のである。それにもかかわらず、「私」は、鳥罌を拒み、テグス虫を殺すことを拒み、それは釣りの拒みへとつながる。蟹釜かにうけにも加わらなかったのである。こうした、「洪作」「私」「井上少年」の生きものに対する眼差しは、その後の井上作品や井上靖の生き方の中に伏流することになる。

「猟銃」は次のように始まる。「私は日本猟人倶楽部クラブの機関誌である「猟友」と言う薄っぺらな雑誌の最近号に「猟銃」と題する一篇の詩を掲載した。斯う言うとき、私は狩猟に多少なりとも関心を持っている人間のように聞えるかも知れないが、もともと殺生を極度に嫌う母親の手に育てられて、未だ曾て空気銃一挺手にした経験はないのである。」——創作上の人物と作家との区別があることは当然である。しかし、作品や作家については多様な探索が許されるはずである。これからも続けてみたい。

昭和十五年の井上靖

日記に見る読書三昧の日々

井上甫壬（井上靖長男の妻）

平成二十年に義母が亡くなり、義父母の住んでいた家の一部を旭川市の井上靖記念館へ移築しました。その際、残っている遺品のほとんどは神奈川近代文学館、旭川市の井上靖記念館、長泉町の井上靖文学館、北上市の日本現代詩歌文学館などにお納めしたのですが、私的なもので手離すにしのびない思い出深いものや未整理のものなどは、大量の本とともに増築した我が家に運び込みました。それらの多くは日常に紛れてそのままになっていましたが、最近やっと少しずつ整理する気持ちになりました。

その中に義母の字で「大切」と書かれたいくつかの大きな茶封筒があり、その一つに、茶色の固表紙のノートが一冊入っていました。昭和十五（一九四〇）年

一月十六日から昭和二十（一九四五）年二月二十八日までの、飛び飛びに書かれた義父の日記帳です。昭和三十三年の「作家のノート」（新潮社版全集・二十四巻）には「新聞記者時代は自由日記という日附の書かれていない同じ体裁の日記帳五冊に、それこそ気が向いた時だけ書き記す形で、いろいろのことを書きつけてある。上役に対する悪口も書いてあれば、奈良の仏像のことも、小説の読後感も書いてある」とあります。まさしく五冊の中の一冊に相違ありません。

この日記帳の中で私が今回扱うのは、昭和十五年の部分で、三十二歳の義父の一月十六日から五月三十日（五月六日からは三十三歳）までの日記です。日々のメモの中にたくさん読書記録が入っています。若いこ

ろ欧米文学に夢中になっていた私にとって、フランス文学がたくさん混じった義父の読書記録の発見はうれしい驚きでした。井上家の食卓でフランス文学が話題になったのは、小西国際交流財団の助成でガリマール社からフランス語訳の『現代日本文学短編選集』及び『現代日本文学詩選集』（一九八九年）が刊行された頃

だけだったと思います。義父が出版委員会の代表を務めていたからです。また、今考えますと、専門がドイツ文学の私の主人の文章に、スタンダールなどのフランス小説がよく出てくるのは、義父の影響ではないかと思えます。

そんなわけで、読書に関係する箇所を選んで、義父の日記をご紹介させていただくことにしました。本来作家の未発表原稿や日記等の公表は、研究者の手を経て行われるべきでしょうから、遠からずそのような機会が来ることを祈っております。

さて、この日記を付け始める前の義父は、昭和十年結婚、十一年京都大学卒業、『流転』で第一回千葉亀

雄賞受賞、十二年大阪毎日新聞社に入社、応召、十三年病気除隊、大阪毎日新聞社の学芸部に復帰といった盛りだくさんの人生の転換期を迎えていました。

大阪毎日新聞社に就職する前の義父は、雑誌の懸賞小説に応募したりして、すでにたくさん詩や短編小説、戯曲を書いていました。

ところが、大阪毎日新聞社に職を得てからの義父は、学芸部の宗教欄と美術欄を兼任する記者として忙しかったのか、この時期から終戦まで、詩を含めて創作といえるものはほとんど残していません。少なくとも今回私が対象とする十五年一月から五月には、新潮社版全集・別巻の作品年表から見ると、書かれたものはほとんどが新聞記事で、創作は五月に京都帝国大学新聞に書いた「旧友」という短編だけです。

その代わり、この時期の義父は、この日記を読むとよく判るのですが、新米の新聞記者として宗教や美術の勉強をしながら大変な量の読書を自分に課しています。まさに勉強一筋、読書三昧の禁欲の日々です。後年のエッセイでも「新聞社へ入って、もはや読書する

時間がないと判ってから、却って読書欲が旺盛になった。不思議だった。美術書、宗教書、国文学関係、哲学と全くの雑学である」「(私の読書遍歴)新潮社版全集・二十四巻」と述べ、新聞社では「主として美術と宗教欄を受け持ったが」「学芸部の自分の席に居るより図書の詰まっている調査部の資料室に居るときの方が多かった」(『過ぎ去りし日』一九七七年)と述懐しています。この当時は給料をほとんど家に入れなかったと義母から聞いたことがあります、さぞかし購入した本も多かったに違いありません。

当時の井上靖はどんな人物であったのか。昭和十五年頃から「かなり頻繁に行ききするようになった」という野間宏は次のように書いています。「丁度彼が応召して北支に渡り病氣をして日本に帰り除隊になって新聞社にもどっていた時のことである。彼は以前にもまして物静かになり沈痛な表情をしていたが、私には彼のその表情の裏に何があるのかということがまだ解っていなかった。しかしそれは戦地に行つて戦争のなかをくぐつてきたものの表情だったのである」(『群像

て下さいました。大切な思い出です。

では、実際に日記を見ていききたいと思います。日記の引用にあたっては、漢字は現行のものに直し、かなづかいはそのままとしました。また、明らかな誤字は特に断らず訂正しました。振り仮名は原文にはなく、こちらで振っています。

一・十六——。一月の前半ひどく周章たゞしく過ぎてしまつた。

このように始まつた十六日の日記は、元旦から十六日までの色々な用事や、友や義母の病氣のことなどがまず記されています。お正月にもかかわらずとても忙しそうです。そして、この日の最後に読みたい本の一覧が付け加えられています。昭和十二年の応召時の「中国行軍日記」以後、途絶えていた日記を再開したのは、読書記録を書きたかつたからではないか、と思わせる量です。

日本の作家20 井上靖『一九九一年』。

義父は自身のことを、後年の「私の自己形成史」(新潮社版全集・二十三巻)のなかで、「よほど親しくならない限り、相手と談笑することのできぬ人見知りする性格」で、それは「新聞社へ入るまでは病的なほどひどかつた」と回顧しています。もつとも学芸部記者として、否応なく人に会わなければならなかつたので、「こうした性格が徐々に矯正され」て、社交ができるようになったということです。

私の知っている義父は六十歳半ば以降で、文壇の紳士と呼ばれるにふさわしく、会話に苦労した時代があつたと言われても俄かには信じられません。お客様だけでなく、手伝いのものにまでとても氣を遣つて、ある夜など、お客様が帰られた後「ご苦労様」の言葉だけでなく、一緒に食器の片付けまでしてくださつたことがありました。また晩年、がんセンターでの診療の帰り、付き添つた私にクレセントや東京會館でよくお昼を御馳走してくださり、その際、若い私が氣づまりにならないようにいろいろお話をなさり、小説の話もし

実に周章^{あわただ}しく一月の半分が終つてしまふ。この日記を元日よりつける予定だつたが、遂に暇なし。読みたい本——アンドレ・モーロア『英国史』。アラン『大戦の思出』。本庄睦男『石狩川』。岡崎義恵『日本文芸の様式』。片岡良一『近代日本の作家と作品』。その他暇あれば、岩波『零の発見』。学生に与ふる書『インフレーション』。『日本美の再発見』。

ラファイエツド夫人『クレエヴの奥方』。アレヴァ^{ママ}『マノンレスコー』。ヴォルテール『カンデイド』。シオデルロス・ド・ラコス『危険な知己』。スタンダール『パルムの僧院』。バルザック『ゴリオ爺さん』。フローベル『ボヴァリイ夫人』。ゾラ『ジェルミナール』。モンパッサン『女の一生』。アナートル・フランス『神々は渴く』——アメリカの出版社ノンサッチ・プレス社で、アンドレ・モーロア、アンドレ・ゲイド、ポール・モーラン等、著名な文学者十名にフランスの最も秀れた小説十を推薦させた結果以上の如し。改造の海外文化展望より。

後半にたくさんのフランス小説の翻訳がはいって驚いたのですが、考えてみると、もともと義父が、小説を自分で書いてみたいと思うほどの大きい感銘を最初に受けたものが、フランスの小説だったのです。

『夏草冬澍』の中にも出てきますが、中学四年の夏休み、友達に薦められたシャルル・ルイ・フィリップの『ピュデュ・ド・モンバルナス』、この娼婦が主人公の作品を読んで「私には急に自分の人生というものが、ひどく生き生きとした、幾らでもそこから享楽を引き出すことのできる、そしてまた、それを幾らでも劇的なものに組み立てることのできる、いろいろな可能性を含んだものとしてたちあらわれてきたのである」(「私の自己形成史」と語っています。初めて読んだ欧米文学の強烈な印象によって、自分でも小説を書けるかもしれないと、目を開かされた経緯があるのです。

一・十九。「……」外で珈琲のんで、モンテルランの「若き娘たち」をよみ乍ら寝て終ふ。今度旅行中に

ても一人も帰つて来ない。男の求めてゐる快樂といふものをふとつまらなく考へる。どの男もく／＼同じだ。といつて一概にけなしきれない。『仮想人物』で秋声が正直に怖ろしい程正直に告白してゐる。謹厳な家庭生活を持つて、晩年になつて妻君を失つてからの痴情生活を描いてある。最後まで一糸乱れぬ文章、創作態度はさすが大家だと思ふ。

一・三十。「……」ブルジェの「死」読了。死の問題を取扱つてあれど、理窟多く打たれるところ少し。死に対する考へは西洋と東洋で随分ひどい違いだ。結局、われ／＼には斯うした西洋人の思想(宗教的)は理解できぬのだらう。生死の大事は凡夫のかゝらふべきでないといふ親鸞の言葉の持つ意味の方により多く圧倒されてしまふ。

この本にしろ、ジイドの「未完の告白」にしろ、モンテルランの「若き娘たち」にしろ、どれも、宗教的な思想にぶつかると、しら／＼と白けて終ふ。と同様に東洋人の「作品」も西洋人には同様に超へら

読んでやらうと思つて、ブルジェの「死」モンテルラン「若き娘たち」秋声「仮想人物」それから従軍看護婦の「病院船」の四冊を鞆につめ込んで来た。今日、列車の中で「若き娘たち」を読了。面白くない。

「今度旅行中」とありますが、名古屋、下諏訪、甲府、塩山、見延などのお寺を回つて取材旅行をしているのです。帰りには旅に疲れて、「明日、無理をしても伊豆で、あの二階の部屋でねむりたい」と伊豆にまで足を延ばします。

一・二〇。「……」宿へ帰つてずつと「仮想人物」、十時ごろ読み了る。もう一晩こゝに泊ることにしてよかつた。湖上では昼間、多勢の大人、小供入混つてスケートをしてゐる。面白そうだが、スキーなどと異つて単調で直き倦きそうだ。団体の客は、(夕方着いた)みんな別館の宴会場へゆく。こゝには芸者が入らないからだ。夜が更けて、宴会は静かになつ

れぬ一線があるのだらう。

ポール・ブルジェの『死』については、読了間もない二月二十九日の大阪毎日新聞「春雷」欄「今日の文学」の冒頭で取り上げ、「ある書店の話では最近、ポール・ブルジェの『死』という小説が圧倒的に売れているそうである。「……」わが国においてそれほどポピュラーになつてゐる作家とは受け取れぬから、おそらく読者の多くは広告の短い内容の紹介か、もしくは『死』というような深刻な題名そのものに惹かれるのであらう」(新潮社版全集二十四巻)と評しています。

また「親鸞の言葉の持つ意味の方により多く圧倒されてしまふ」と書かれていますが、義父は晩年、手術後の病院通いのタクシーの中で私に、「もう少し生きていられるのなら、終戦直前に毎日新聞社の屋上で伝書鳩の世話をしていたおじさんのことを書きたい、それから親鸞を書きたい」と話しました。『孔子』を書いていた頃でしたが、親鸞もずっと気にかかつていた人物だったのでしよう。残念なことでした。

二・四 寒し。時折晴れたり雪が落ちたり。午前中「日本文学の様式」十頁ほど、二階で。午後、森君のところへ見舞。往復の電車の中で中央公論につてゐるジャン・ポール・サルトルといふ昨年処女作「嘔気」を発表してフランス文壇に出た若い作家の「壁」といふ短篇をよむ。堀口大学訳。死刑宣告を受けた三人の男を描写して真に迫つてゐる。最近これほど感銘を受けた作なし。持つて廻つた心理描写はなく、てきぱきと荒いタッチで、そのくせ実に細心に死に対する恐怖をかいて完璧だ。

二・六 「……」片桐君子、訪ねてくる。ビーコンでお茶を呑み乍ら話す。大衆ものには何の感激も興味もないのは吾ながら愕く。話の内容があんまり判然りと通俗的なもので埋められてゐるので癖易させられる。直木賞をとれるらしい口振り。いゝ加減なものだと思ふ。

「……」

ツに這入つて「濃東綺譚」を読み出し、夕方までにこれも読み終る。やはり面白い。所々感心させられる。秋声と違つて、文中至るところに時運に見離された不遇をかこつてゐるが、秋声より楽しそうだ。老作家の痴情小説を二篇よんだわけだが、どちらもやはり立派なものである。

二・二十三 「……」夜、芥川賞の寒川光太郎「密猟者」をよむ。一気に面白く読ませる点は感心する。悪くすれば大衆小説になるものを兎も角芸術小説としての水準までにたかめてゐる。そうした意味では新しいといへるかも知れないが、併しやはり所々、通俗的な割り切つた観念は相当眼につく。この前の「浅草の子供」「鶏騒動」などに比べたらともかく、構成的であるし、一つのテーマに向つて、丹念に組立てゝ、苦心してゐる。自分が若しこれを書いたとしても、大して嬉れしくはないような気がする、何故か。やはり、作り物だからだ。この中には何処にも作者はいない。特異な人物の特異な気持を取扱つ

一日を振返つて不快なこと多し。伊豆へ帰つて小説でも書いてつく／＼暮し度し。新聞社のことを考へると、伊豆の生活の方が数等美しい。親戚のことや何かで嫌なことはあつても、そうした嫌なことどこかまだ／＼澄んで、静かに気持を打たせてゐられそうだ。

夜「日本文学の様式」の様式論。これで第一章だけよみ終つたわけだ。文芸の常識として持つて居るべき知識といふ意味ぐらゐなら、読んだだけはあるかも知れない。所々飛躍してゐるので妙に頼りない所がある。国文学者が、どんな仕事をしてゐるのか、今まで殆んど無智だつたので、その点では面白し

二・十一 紀元節、九時起床。少し腹の気持悪し、朝食後、階下でコタツに這入り、昨日買った「日本仏教発達概観」をよみ出す。百五十頁ほどの小冊子だが、大変まとまりよく面白く書いてゐるので、また／＼間に読んでしまふ。二千六百年の紀元節らしく、兎にかく仏教史一冊読んだわけだ。「……」コタ

てゐる、あまり突飛なので一寸ついてゆけない。名人気質、芸人気質なんでものは、失敗すると通俗的に一面的になつてしまふ。成功してもこの程度だ。芥川賞候補作金史良「光の中に」。何の奇異もない平板な文章。たゞテーマは確かに価値がある。文学的なそれではなく、社会政策的に価値がある。人物の出入れ、筋の運びは幼稚なくらゐたど／＼しいが、素直である。やはり終りまで大して怠惰なしに読める。この前の「浅草の子供」「鶏騒動」程度。若しこの前だつたらこれが受賞したかも知れない。

三月一日の日記には、次頁に写真を載せたように、その月の執筆と読書の予定を書き出しています。義父は「スケジュールを立てる」というエッセイで、「私は学生時代にも、新聞社に勤めている時も、よく読書の計画を立てた。日記に読むべく予定した書物の名を書き込んだり、読んだ書物について自分の小さい感想を書くノートを造つたりした。その通りに実行できたためしはなかったが、併し、現在でもそうした時のこ

二・二十八	印度の繪を五十四幅、仕事なし。
二・二十九	直ぐ京都へ行く、本山物語リ―東京、 電車ではひどく寒い。塔の宮殿は三枚寫す。四時帰社。 本居から仏教史綱のお札にネリタイかき。遊園地のし やふたんの。
三・一	起きてみる。一面雪、雪を待ってある。寒い。 ・今日から仕事始め。まづ三月の予定をたてる。 夜八時―十時 執筆 朝八時―十時 執筆 本居の日記は自由に執筆時間を定めること。 （お母さん）
三月中の読書	徳田秋声 アララギ 文学語録 ジイド 泰西論 伊藤整 文学論 作田直 近世作家と作品 ブルースト
三・二	打合せ會、仕事なし
三・三	日曜、めづきり春めいてくる。午前、飯の 調理。午後、三階片付け、薪をのり手で田圃へ出る。 ・たまの日曜なので、サビスとしてやる。夜、藤井、 吉本、今井富士雄の手紙。今井吉士郎、松屋のふたつ

昭和15年2月28日～3月3日の日記。義父らしい真面目な計画表

を思い出すと、一種言い難い心のときめきを感じず
る」(新潮社版全集・二十四巻)と書いています。まさに
この日記もその一つでしょう。

この真面目な計画表と違って、新聞社への出社の方
は、だいぶルーズな状態であつたらしいのです。しか
し義母は、エッセイ「やがて芽を吹く」(一九九六年)
の中で、義父の遅い新聞社への出勤について、「怠け
て遅くなるのではなかった。少しでも自分の時間が欲
しかったのだ。ぎりぎりまで本をよんでいた。社に行
く前は、本を読むか、奈良か高野山に行っていた。
仏様や曼荼羅を見ることによって、仏教美術を吸収し
ていた時期であつた」と記しています。

私の知っている晩年の義父の頭の中は、いつも創作
のことばかりのようでした。用事で外出しない日は、
ほとんど書齋で過ごしていました。朝起きて、お風呂
に入り、書齋で新聞を読みながらパンの朝食、義母が
心を込めて作ったコンソメスープ付き。昼食も客がい
ない限り書齋でとりました。お昼にはよく大好きな鰻
を所望。お客様や子供達が来ていると居間か客間で夕

食を取りましたが、書齋が一番落ち着くようでした。
ジープで過酷な砂漠の旅をして帰ってきてても、まず

書齋に入り、籐椅子に座り庭をながめ、机につく。あ
る時など帰宅後一時間もしないで新聞小説を一日分書
きあげていました。旅の疲れで主人ならごろりとする
のに、義父がごろごろするのは見たことがありません。

三・三 日曜、めづきり春めいてくる。午前、写真
の整理。午後、二階片付け、「……」徳田秋声の随筆
「思ひ出るまゝ」を読み出す。

J・P・サルタン^(ママ)の「壁」をもう一度、読み返す。

三・七 九時起床。朝疲れる。新進堂でお茶をのみ、
学而堂から、和辻哲郎「古社寺巡り」。外村繁「草
いかだ」テーヌ「作家論」。電車の中で伊藤整の文
学論をよむ。社で仕事なし。「……」夜、秋声のあら
くれ読んでしまふ。際限なく続いて行きそうな小説
だ。主人公の女の一生を書いてもこの調子では、平
気で続けられそうだ。ふんだんに出る風景自然の描

写は鋭し。この一篇で自然主義の小説がこれで解つ
たような気がする。

三・十一 社で税務所へ出す所得税の申告書を書く。
申告する身分になつた。といふ気がする。徳田秋声
の短篇「折靴」^(ママ)「風呂桶」を読む。これこそ典型的
な心辺^(ママ)小説。「折靴」など終世読んだ印象はおそら
く消えぬものだらうと思ふ。妻の死を怖ろしい程冷
静に突放して描いてゐる。

四・七 快晴、日曜。午前中、藤原以前の日本画の
勉強。フローベル全集、学而堂より来る。「……」夜、
フローベルの初期の作品「情熱と道徳」をよむ。十
六歳の時の作だといふ。怖い。ボヴァリー夫人の
下書きのようなもの。明日からボヴァリー夫人を、
出来るだけ丹念に読んでみよう。

四・二十八 日曜、久しぶりで仕事なし。「……」村
上專精の「日本仏教史綱」読み始める。

五・六 「……」車中で、川端康成『小説研究』とT・E・サルドル^マ『するかざる』を読む。十一時京都着。

五・七 朝、京大新聞の『旧友』をよむ。がらんぐした頭で、あはたゞしく書いた物としては上出来かも知れぬ。併し方々に大きい文章の欠陥が眼につく。

五・三〇 此の間からフローベル「ボヴァリー夫人」、兵隊さんの「火の赤十字」梶井基次郎「のんきな患者」その他、雑誌の小説など読んだ。「ボヴァリー夫人」には文句なしに引きずり込まれた。女性をあんなに判然^{はつき}り描き出したものは他に比べるものがないと思つた。ボヴァリー夫人をあんなにしたものは何だらう。それは女性すべてが、心と肉体の中に持つてゐるものだ。それをフローベルが引きずり出して赴くところに赴かしめた。運命などといふ

『ボヴァリー夫人』に依つて、小説というものがいかなるものかを教わり、作家の人間を見る眼がどのようなものかを教わつた。「……」この小説を読まなかつたら、純粹に小説の要素だけで組建てられた作品の世界の確かさを今のように信ずることができたかどうか判らないと思う」と書いています。

また「小説について」（『わが人生観』一九六九年）というモデル論を展開した講演録においても、フローベルを取り上げています。「小説を書いておりまして、あなたの小説のモデルを知っていると行かれても非常に困ります。あるいは今度の小説のモデルはどなたですか、というようなことを訊かれまして、本当の意味では返事に困るわけで、あれは自分だとも言うよりしようがないようなものであります。フローベルが名作『ボヴァリー夫人』の主人公であるボヴァリー夫人は私だ、自分だといったことは有名なお話であります。まさしくある意味で、ボヴァリー夫人はフローベルその人であるに違いありません」。

後年これ以外にも『ボヴァリー夫人』については言

ものではない。

梶井基次郎のものは志賀直哉と共通する。志賀の短篇『城崎にて』も最近よんだ日本の作家のものではやはり一番感心した。

義父はフローベルの『ボヴァリー夫人』がとくに気に入つたようで、後年息子たちにも「面白い小説だ」と話していたと聞いています。昭和四十一年に筑摩書房から出版された『フローベル全集』の内容見本で義父は、「私は戦争の末期、トルストイ、ドストエフスキー、ゴーゴリ、バルザック、スタンダール、フローベールなどの全集を持っていた。いずれももう文学全集などというものが絶対に入手できない時代が来ると思つて、戦争の初期に買い込んだものであつた。「……」疎開騒ぎの時と、戦後お金に困つた時代に、それらをどうしようもなくて次々に手離していった。「……」『ボヴァリー夫人』だけが一冊残つた。その本は今も持つてゐる。「……」当時私は自分が小説家になるつもりはなかつたが、フローベールに依つて、特に

及しています。義父に強い感動を与えた作品なのです。

このたつた五か月の読書三昧の日々の日記ですが、義父の文学に対する熱い思いが伝わってきます。創作を始める前の、読書三昧のこの日々から終戦までの時期について、山本健吉氏は、年譜から見れば「欠史時代」であるが、「雌伏と蓄積の時代であつた」（『群像日本の作家20 井上靖』）としています。

フランス文学、日本文学、そして新聞記者としての関心からの仏教や美術の読書体験が戦後の義父の作品群にどう生かされたかは、私にはよくわかりません。しかし、こうして吸収したもので義父の頭と体はいっぱいになっていて、戦争終結と同時にそれらは解き放たれ、詩や小説という自己表現になつて溢れ出していたのでしょ

事業報告

理事長 井上修一

平成二十七年 度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 井上靖を記念する文化賞

文学・美術・歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」の再開は、長年模索が続いていましたが、二十八年度から文化振興や地域振興に貢献する個人や団体を顕彰する新たな事業として、旭川市の協力を得て再出発することになりました。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

「井上靖（奨励金）賞」はオーストラリア・ニュージーランドにおける日本文学の研究奨励のために、平

成十八年にシドニー大学に設立したものです。選考はシドニー大学の井上靖（奨励金）賞選考委員会にお願いしてあります。今年度はその第九回になりますが、作家で日本文学の研究、翻訳に数々の功績のあるオーストラリアのロジャー・バルバース（Roger Pulvers）氏にさしあげることになり、平成二十七年九月十八日、シドニー大学・本財団共催、国際交流基金シドニー・豪日経済協力委員会・シドニー日本人会等の協力で、シドニー大学のオウデイトリウム・チャールズ・パークインズ・センターにて授与式が行われました。

国際交流基金ベトナム日本文化交流センターとの共催で、平成二十七年 度から始まったベトナムにおける



第1回「井上賞・日本文学研究論文コンテスト」の受賞者と関係者

日本文化・文学研究者もしくは研究団体に対する援助事業「井上賞・日本文学研究論文コンテスト」の第一回は、平成二十八年度三月に優秀な論文五点を選出しました。審査委員はハノイ文学協会会長 Pham Xuan

Nguyen、ハノイ人文社会科学大学 Phan Hai Linh、ホーチミン人文社会科学大学 Phan Nhut Chieu の三氏です。四月五日、ハノイのメリアホテル会議場にて授賞式を行いました。受賞論文五点は次の通りです。

第一位： Nguyen Anh Tuan（ハノイ人文社会科学大学院生）“Women's poetry in Manyoshu”

第二位： Tran Thi Hai Yen（ベトナム社会科学院文学研究院研究員）“The essence of the novel and discourse on novel: A quest for The nature and path of premodern East Asian novels”

第三位： Ngo Tra Mi（ホーチミン人文社会科学大学文学言語学部講師）“Makura no soshi by Sei Shonagon in the genre of Japanese zuihitsu”

第四位： Phan Thu Van（ホーチミン師範大学講師）“The warrior and the wolf by Inoue Yasushi: Dream of western regions from literary work to film”

同： Nguyen Bich Nha Truc（ホーチミン師範大学講師）“Narrative techniques in Murakami Haruki's novel”

また、井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』の刊行助成を行うとともに、ホームページ作成の助成もいたしました。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○井上靖記念館（旭川市）

平成二十七年四月一日、旭川市立井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年）を更新

平成二十七年七月一日『旭川市立井上靖記念館報』第十五号の発行に協賛

常設展示とともに、左記の企画展などを共催で実施しました。

平成二十七年五月十七日「井上靖と西域紀行展1」

関連講座、ギャラリートーク「井上靖と西域を旅して」

講師・佐藤純子氏（日本中国文化交流協会理事）

平成二十七年五月二十三日から七月十二日、第一

回企画展「井上靖 人と文学Ⅵ『氷壁』の頃」（昭和二十九年に新聞連載を開始した『あした来る人』、昭和三十一年連載の『氷壁』の頃の井上靖に焦点を当て、取材、

執筆、講演と多彩な活動をする姿を紹介）。六月十三日、関連の「井上靖講座」講師・芳賀孝郎氏（元日本山岳会副会長）

平成二十七年七月十八日から十月四日、第二回企画

展「井上靖と利休『本覚坊遺文』の周辺」（利休の手紙の実物など、関連する資料を紹介し、井上靖が死を前にした利休の心をどう描いたかを探る）。八月二十九日、関連の「井上靖講座」講師・平野武弘氏（当館職員）

平成二十七年十月十日から平成二十八年一月十一日、

第三回企画展「井上靖と美術」（美術評論家としての井上靖を紹介するほか、女性画商が主人公の長編小説『河口』に焦点を当て、その作品中に登場するデュフィとローレックの素描画を展示）。十一月七日、関連の「井上靖講座」

平成二十八年一月十六日から四月十日、第四回企画展「旭川ゆかりの詩人——鈴木政輝」。三月十二日、

関連の「井上靖講座」講師・東延江氏（旭川文学資料館副館長）

○井上靖文学館（長泉町）

常設展示の他に二つの企画展を本財団の後援で開催

平成二十七年四月二十三日から七月二十七日、「福田豊四郎と井上靖」展

平成二十七年八月六日から平成二十八年三月二十九

日、「戦後七十年 井上靖と戦争・家族・ふるさと」展

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力

○アジア博物館・井上靖記念館（米子市）

平成二十七年十月一日、友の会会報『海鳴り』第三十八号の発行に協力

平成二十八年三月三十一日、友の会会報『海鳴り』第三十九号の発行に協力

(四) 日本近代文学に関する資料収集及び調査研究

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・ア

ルバム・書簡等の収集整理を行うとともに、平成二十八年三月、日本近代文学館の資料収集に協力しました。また井上靖の資料収集・調査研究結果などを掲載している当財団機関誌『伝書鳩』第十六号を平成二十七年十二月に発行しました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

○平成二十七年九月十八日

シドニー大学での「井上靖（奨励金）賞」授与式に続く受賞者の講演の後に文化プログラム「井上靖と日本の四季」が行われ、シドニーさくら合唱団（村松貞治指揮）による日本の歌の合唱、クラブ「声」によるDr. Yasuko Clarendon 英訳の井上靖の詩の朗読が行われました。

○平成二十七年七月二十五日

井上靖研究会の夏季研究会が北上市の日本現代詩歌文学館で行われ、本財団からも参加いたしました。山田哲久氏（同志社女子高等学校教諭）の研究発表「井上

靖『洪水』論、綾目広治氏（ノートルダム清心女子大学教授）の研究発表「『孔子』論」

○平成二十七年十二月六日

井上靖研究会の冬季研究会が國學院大學院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。魏大海氏（関西外国語大学教授）の研究発表「井上靖の『蒼き狼』に関連する諸問題」、福田美鈴氏（福田正夫詩の会代表）による講演「井上靖・『焰』から」

○平成二十七年十二月二十日

旭川市教育委員会、井上靖記念館、北海道新聞社主催、本財団後援で全国の中・高校生を対照にした第四回「井上靖記念館青少年エッセーコンクール」の表彰式が井上靖記念館ラウンジで行われました。募集テーマは「書く」です。審査員長は吉増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館副理事長）、鳥居和比徒（北海道新聞文化部長）の各氏です。最優秀賞

付属中学校三年）、井山智資「旅路の分岐点で」（筑

波大学付属中学校三年）

感映画最優秀賞

小学生の部 北野遙「洪作と夕日」（天城小学校五年）

また午後には同ホールで劇団「しろばんば」による

公演「しろばんば——家族」（監督脚本…田村千恵美）

が上演されました。

○平成二十八年三月十三日

長泉町の井上靖文学館にて黒田佳子氏による講演

「父の中国行軍日記」が行われました。

（六）特定寄附事業

平成二十七年年度においては、特定寄附事業はありませんでした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

中学の部 遠藤港音「『おもしろい』のひとことから」（筑波大学附属中学校一年）

高校の部 奥村玲菜「てのひらの記憶」（北海道旭川工業高等学校一年）

表彰式の後、吉増剛造氏によるミニ講演会が行われました。

○平成二十八年一月二十四日

「あすなろ忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・劇団しろばんば・伊豆市・静岡新聞社・静岡放送・本財団などの後援で催されました。伊豆市湯ヶ島熊野山墓地での墓参会、天城会館劇場ホールで井上靖作品読書感想文・感映画コンクール優秀作品の発表ならびに表彰式が行われました。

読書感想文最優秀賞

小学生の部 小倉夕依「『あすなろう』と思う心」（中伊豆小学校六年）

中学生の部 鈴木奎哉「北の海を読んで」（筑波大学

○軽井沢高原文庫

平成二十七年四月二十四日から七月十三日、春季企

画展「戦後七十年 幅北光が撮った軽井沢の文学者・

芸術家」。幅北光が井上靖関連で『毎日新聞』から切

り抜いた資料、井上靖『憂愁平野』（昭和三十八年一月、新潮社刊。冒頭部で軽井沢が描かれる。挿画・生沢朗）

の展示

○新宿区立新宿歴史博物館

平成二十七年五月十六日から七月五日、「田辺茂一 生誕一一〇年 作家五十人の直筆原稿 雑誌『風景』より」。井上靖の原稿と遺愛品の展示

○旭川市立井上靖記念館

平成二十七年七月二十五日、文学講演会「井上靖の歴史小説『おろしや国酔夢譚』」講師・藤澤全氏（元日本大学教授）

平成二十七年九月二十六日、文学講座「井上作品と

中島敦『山月記』講師・石本裕之氏（国立旭川工業高等専門学校教授）

平成二十七年十月二十四日、井上靖原作映画化作品上映会「黒い潮」

平成二十七年十一月二十一日、文学講座「藤尾が読み解く『夏草冬濤』『北の海』の藤尾」講師・藤尾均氏（旭川医科大学副学長）

平成二十八年一月二十三日、文学講座「口語自由詩あるいは散文詩をよむ」講師・片山晴夫氏（北海道教育大学名誉教授）

○井上靖ナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）

平成二十七年八月一日、『赤い実の洋燈』^{ランブ}四十六号発行

平成二十八年二月二十日、『赤い実の洋燈』^{ランブ}四十七号発行

○井上靖文学館（長泉町）・文学展講座

平成二十七年九月二十日、講師・宮崎潤一「井上靖

と戦争」

平成二十七年十一月八日、講師・福田美鈴「父・福田正夫、井上靖、戦争のこと」

平成二十七年十二月六日、講師・勝呂奏氏（桜美林大学教授）「芹沢光治良と井上靖の戦争」

○日南町美術館・企画展の開催

平成二十七年九月十一日から十月二十五日、「日南町ゆかりの文学者たち part2 井上靖」

○聖徳大学言語文化研究所・公開講演会

平成二十七年十月十七日、講師・井上修一「利休の死」

○大黒屋光太夫記念館

平成二十七年十月二十四日から十二月十三日、第十一回特別展「井上靖『おろしや国酔夢譚』の世界」

○「伊豆文学フェスティバル」

平成二十八年三月六日、伊豆文学フェスティバル実行委員会・静岡県・静岡県教育委員会主催

第十九回伊豆文学賞表彰式と伊豆文学塾（審査員による講演会・座談会）

○「伊豆文学まつり」（伊豆文学フェスティバル連携イベント）

平成二十七年一月二十五日から三月八日、伊豆市・伊豆市教育委員会主催

井上靖作品読書感想文・感想画コンクール入選作品展示、伊豆文学散歩、伊豆市ゆかりの文学作品朗読会、伊豆市ゆかりの文学作品特別展示、井上靖資料室公開、劇団しろばんば創作劇、ミュージカルしろばんば上演等

（八）役員

平成二十七年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次の方々でした。

理事長 井上修一

常務理事 浦城幾世

理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 佐藤吉之輔

監事 佐藤純子

大谷光敏

井上卓也 相賀昌宏 小西龍作 黒井千次

篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建

（五十音順）

本財団の設立当初からご尽力下さった、小西甚右衛門氏の後を継いで評議員を引き受けてくださった小西龍作氏、長年ご指導してくださった評議員の黒井千次氏、理事の佐藤吉之輔氏、また一般財団への移行時に理事から監事の役を引き受けてくださった大谷光敏氏が、二十七年限りでご都合によりお引きになられました。長らくご指導ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。

なお平成二十八年六月七日の評議員会で選任された、新しい理事・監事・評議員は次の方々です。末永くご

支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

理事長 井上修一

常務理事 浦城幾世

理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 小池語朗

佐藤純子

監事 高橋いづみ

評議員 井上卓也 相賀昌宏 表 憲章 小西千尋

篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建

(五十音順)

また財団の住所は平成二十八年七月一日より左記に変更になっております。

一般財団法人 井上靖記念文化財団

一五六―〇〇五三 東京都世田谷区桜三丁目五番地九

電話・FAX・〇三―三四二六―九八三六

◎『井上靖研究』第一五号 目次紹介

論文

綾目広治「井上靖『孔子』論——社会改良家としての孔子像」

高木伸幸「井上靖『天平の甍』考——「学問」と「冒険」小田島本有「語る「わし」、語られる「わし」——「比良のシャクナゲ」論」

稲村拓也「井上靖の詩「三月」について」

蘇洋「井上靖「楼蘭」論——「楼蘭」における〈水〉、〈ロプ湖〉と〈河竜〉をめぐる」

劉淙淙「井上靖「孔子」に描かれる隠者のときき人物たち——長沮と桀溺、接輿、荷蓑丈人、そして蕲簞」

李哲権「壺の力学・壺の生を生きる詩人（上）——井上靖の想像力への夢想」

エッセイ

福田美鈴「工藤茂さんにおくる——感謝をこめて」

小野寺峯「校歌作詞者・井上靖」

岡田公子「私と読書会」

瀬戸口宣司「詩集『運河』のこと——村野四郎の評価を見る」

鳩のおしらせ②

◎井上靖『中国行軍日記』（井上靖文学館編）

大阪毎日新聞社時代の井上靖が、輜重兵として行軍した中国・北支の地でつづった日記（『新潮』二〇〇九年十二月号に発表）が、単行本として刊行されました。戦地から送った手紙、関連する小説、黒田佳子（井上靖次女）による現地を訪れてのエッセイなどに加え、文学館からの発行らしく、貴重な写真も豊富に収録され、資料的価値だけでなく、見て楽しめる一冊にもなっています。



井上靖
『中国行軍日記』

A5判並製・144頁・本体1000円
2016年3月刊行
問い合わせ：井上靖文学館
☎ 055-986-1771
<http://inoue-yasushi-museum.jp/>

◎浦城いくよ『父井上靖と私』

当財団常務理事の浦城幾世（井上靖長女）が、初の著書として『父井上靖と私』（ユーフォーブックス）を上梓しました。父との思い出を振り返り、自身の幼少期から靖の没後まで、長年のエピソードが丁寧にまとめられています。

『目次』三十五年ぶりに届いた父からの手紙／子供の頃住んだ家／世田谷の家に移って／祖父母と父母／父の趣味 交友／旅の思い出／父の作品にまつわる思い出



四六判並製・262頁・本体1500円
2016年5月刊行
問い合わせ：ユーフォーブックス
☎ 03-5332-6175
<http://www.u-4.org>

図書だより



二〇一五年四月以降に刊行、発表された井上靖に関係する書籍、論文、記事等をご紹介します。

【書籍】

- 井上靖『中国行軍日記』（井上靖文学館、二〇一六年三月）
- 浦城いくよ『父 井上靖と私』（ユーフォーブックス、二〇一六年五月）

【論文・記事】

- 蘇洋「井上靖「孔子」論——負函という地の意味」『阪神近代文学研究』一六号、二〇一五年五月）

- 半田美永「井上靖『孔子』覚書——「逝くもの」の彼方に」『皇学館論叢』四八巻三号、二〇一五年六月）
- 安元隆子「大黒屋光太夫の描き方——井上靖『おろしや国酔夢譚』と吉村昭『大黒屋光太夫』」『解釈』六一巻七・八号、二〇一五年七月）

- 劉淙淙「井上靖「楼蘭」における宿命観——〈白い河床〉の象徴性について」『皇学館論叢』四八巻四号、二〇一五年八月）

- 宮崎潤一「井上靖の従軍体験から見えるもの——西域小説と詩集『北國』の源泉 傍観者の発生と仲間たち昭和一二二年」『群馬の思想・文学・教育』二〇一五年）

- 李哲権「西域の生を生きる夢想——井上靖の『洪水』を読む」『聖徳大学言語文化研究所論叢』二三号、二〇一五年）

- 劉淙淙「井上靖『孔子』における〈川〉の象徴性——「逝くもの」の解釈を巡って」『解釈』六二巻一・二号、二〇一六年一月）

- 「名門高校の校風と人脈（18） 沼津東高校（静岡県立・沼津市）特筆すべき文化勲章3人——井上靖、長倉三郎、大岡信」『エコノミスト』二〇一六年三月）
- 趙秀娟「井上靖『孔子』の中国における受容について（1）」『アジア・文化・歴史』一号、二〇一六年四月）
- 礪波護「佐伯富先生と井上靖『通夜の客』」『敦煌から奈良・京都へ』法藏館、二〇一六年一〇月）

【その他】

- 『旭川が生んだ文豪井上靖——井上靖読書会二十周年記念誌』（井上靖読書会、二〇一五年六月）
- 『井上靖「おろしや国酔夢譚」の世界——大黒屋光太夫記念館第11回特別展』（鈴鹿市、二〇一五年一〇月）

月）

- 中西憲二『文豪井上靖先生と私——井上靖文学碑の建立から記念館誕生まで』（二〇一五年一二月）

- 『入選作品集——井上靖作品読書感想文・感想画コンクール 平成二七年度』（伊豆市教育委員会社会教育課、二〇一五年）

- 日南町教育委員会『井上靖——日南町ゆかりの文豪』（日南町教育委員会、二〇一六年三月）

- 『旭川が生んだ文豪井上靖——井上靖読書会二十周年記念誌』（井上靖読書会、二〇一五年六月）

- 『井上靖研究』一五号（井上靖研究会、二〇一六年七月）



編集後記

『伝書鳩』十七号をお送りいたします。

十五号から、靖の子供たちの配偶者に、執筆を依頼しています。今号、私の母に順番が回ってきたことを告げると、祖父の日記を取り上げたい、と切り出され、随分驚きました。しかしその日記を手にとってみると、個人的な日記と言えども文字ははっきりと書かれ、祖父の読書欲や執筆欲がうなりをあげる文章だったので、他の遺族の承諾を得、掲載することにしました。

今回載せられなかった多くの日々についても、しかるべき校訂を経て、将来本誌にて全文掲載いたします。生前、曾根博義先生には大変お世話になりました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。曾根先生監修のもと、祖父の未発表資料の連載を十号から三回続けましたが、休載しておりました。しかし曾根先生がお話ししてくださった魅力的な構想を実現すべく、この連載を再開する予定です。

今後とも、『伝書鳩』をどうぞよろしくお願いいたします。

西村承子

伝書鳩 第17号

発行 二〇一六年十二月二十二日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九 井上芳

印刷所 株式会社 厚德社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団